

# ヨムギ古墳

福岡県糟屋郡須恵町所在古墳の調査

## 序

この報告書は、昭和63年5月12日から同年6月25日まで、須恵町教育委員会が福岡県教育委員会の指導を受け、須恵町大字須恵・植木の大字界にあった古墳の発掘調査を行った記録です。

この地区の開発は、学校教育における中学校新設の要にせまられて着手されました。豊かな自然を背景に、歴史の舞台を眼下に見ることができる良好の地に設置の計画が進みましたが、埋蔵文化財の分布調査で、古墳が発見されました。

この古墳に対して、保存のための検討を重ねましたが、建設計画の変更が極めて難しいため、止むなく発掘調査をもって、この貴重な文化遺産を記録にとどめることにいたしました。

報告書発刊までの間、埋蔵文化財に対して深い御理解、御協力をいただきました方々に深く感謝の意を表します。

平成元年3月31日

須恵町教育委員会

教育長 鳶 末 友三郎

## 例 言

1. 本書は、須恵町立中学校建設によって破壊されるヨムギ古墳を昭和63年5月12日から6月25日までに発掘調査した報告書である。
2. 遺物の整理は、鉄製品を九州歴史資料館の横田義章参事補佐、土器は岩瀬正信の指導で実施し、図面作成については調査担当者の外に豊福弥生・原カヨ子・大田育子・鶴田佳子が従事し、掲載写真は遺構を橋口達也・池辺元明、遺物を九州歴史資料館の石丸洋技術主査とその指導のもと須原悦子が担当した。また、空中写真は「(有)空中企画」に依頼した。
3. 本書の執筆はIを高山慶太郎が、他の執筆と編集には池辺があたった。

## 本文目次

I はじめに	
(1) 調査の経過	1
(2) 遺跡の位置と環境	2
II 調査の内容	
(1) 墳 丘	4
(2) 主 体 部	8
(3) 出 土 遺 物	10
III おわりに	32

## 図 版 目 次

		本文対照頁
図版 1	(1) ヨムギ古墳遠景 (岳城山山頂から) .....	2
	(2) ヨムギ古墳遠景 (北西から) .....	2
図版 2	(1) ヨムギ古墳全景 (北から) .....	4
	(2) ヨムギ古墳全景 (東上空から) .....	4
図版 3	(1) 発掘後全景 1 .....	4
	(2) 発掘後全景 2 .....	7
図版 4	(1) 墳丘内列石 (西から) .....	7
	(2) 墳丘内列石 (南から) .....	7
図版 5	(1) 石室奥壁 .....	8
	(2) 石室敷石と玄門 .....	8
図版 6	(1) 石室右側壁 .....	8
	(2) 石室左側壁 .....	8
図版 7	(1) 羨道と玄門 .....	8
	(2) 羨道部敷石と仕切石 .....	8
図版 8	(1) 玄門と閉塞石 (墓道から) .....	8
	(2) 羨道と閉塞石 (玄室から) .....	8
図版 9	(1) 石室と羨道の遺物出土状態 .....	10
	(2) 遺物出土状態 .....	10
図版10	(1) 玄門付近の遺物出土状態 .....	10
	(2) 玄門付近の遺物出土状態 .....	10
図版11	(1) 玄門付近の遺物出土状態 .....	10
	(2) 玄門付近の遺物出土状態 .....	10
図版12	出土遺物 1 .....	10
図版13	出土遺物 2 .....	14
図版14	出土遺物 3 .....	17
図版15	出土遺物 4 .....	18
図版16	出土遺物 5 .....	20
図版17	出土遺物 6 .....	20
図版18	出土遺物 7 .....	26
図版19	出土遺物 8 .....	26
図版20	出土遺物 9 .....	29

## 挿 図 目 次

	頁
第1図 遺跡分布図(縮尺1/25,000) .....	3
第2図 ヨムギ古墳位置図(縮尺1/5,000) .....	4
第3図 ヨムギ古墳地形測量図(縮尺1/300) .....	5
第4図 ヨムギ古墳墳丘土層図(縮尺1/60) .....	6
第5図 ヨムギ古墳地山面地形図(縮尺1/200) .....	7
第6図 石室実測図(縮尺1/60) .....	9
第7図 遺物出土状態実測図(縮尺1/30) .....	10
第8図 耳環実測図(縮尺1/2) .....	10
第9図 ガラス小玉・勾玉実測図(実大) .....	11
第10図 土玉実測図(実大) .....	12
第11図 鉄器実測図①(縮尺1/4) .....	14
第12図 鉄器実測図②(縮尺1/2) .....	15
第13図 鉄器実測図③(縮尺1/2) .....	16
第14図 鉄器実測図④(縮尺1/2) .....	17
第15図 出土土器実測図①(縮尺1/3) .....	19
第16図 出土土器実測図②(縮尺1/3) .....	21
第17図 出土土器実測図③(縮尺1/3) .....	22
第18図 出土土器実測図④(縮尺1/3) .....	23
第19図 出土土器実測図⑤(縮尺1/3) .....	24
第20図 出土土器実測図⑥(縮尺1/3) .....	25
第21図 出土土器実測図⑦(縮尺1/3) .....	27
第22図 出土土器実測図⑧(縮尺1/3) .....	28
第23図 出土土器実測図⑨(縮尺1/3) .....	29
第24図 出土土器実測図⑩(縮尺1/3) .....	30
第25図 ヘラ記号実測図(縮尺1/3) .....	31

## 表 目 次

表1 ガラス小玉計測表 .....	13
表2 土玉計測表 .....	13

# I はじめに

## (1) 調査の経過

当該発掘調査の端緒は、須恵町の新中学校建設計画による開発である。

昭和62年12月に行った町教育委員会の埋蔵文化財分布調査の際、未発見であった1基の古墳を確認した。このことについて町教育委員会は、遅滞なく福岡県文化財保護指導員平ノ内幸治氏に連絡、同時に福岡県教育庁福岡教育事務所への報告を行った。

文化財保護の見地と県からの指導によって当該古墳の保存を考慮したが、中学校建設計画の変更は極めて困難であると判断した町教育委員会は、止むなく事前の発掘調査を実施し、記録保存することとなった。

発掘調査は、昭和63年5月12日から6月25日の間に須恵町が主体となり、福岡県教育庁福岡教育事務所から担当職員の派遣を受け実施した。

調査関係者は次のとおりである。

### 総括・庶務

須恵町教育委員会	教 育 長	畷 末 友三郎
	教 育 次 長	武 井 宏 之
	社 会 教 育 課 長	川 添 光
	社 会 教 育 課 主 幹	稲 永 美 弘
	社 会 教 育 課 係 長	吉 松 清
	須恵町立歴史民俗資料館	高 山 慶太郎
		大 場 通 子

### 発掘調査

福岡県教育庁福岡教育事務所社会教育課	技術主査	橋 口 達 也
	技術主査	池 辺 元 明

また、調査を円滑に進めるにあたって、松本・猪谷建設工事共同企業体の各位、町建設課平山良治、県文化財保護指導員平ノ内幸治、県文化課飛野博文、半田博明各氏の指導と協力を得たことを記して謝意を表したい。

現場作業には下記の方々の協力を得た。

安達ミト・稲永カズエ・井上ハツエ・北丸ハナコ・合屋ナミコ・高吉キクエ・竹林義之・畑瀬正行・波多野義之助・波多野キクエ・福沢シズカ・見月正史・安河内勘三郎・吉松義一

## (2) 遺跡の位置と環境

本古墳は、福岡平野の東側を仕切る三郡山地に属する若杉山北西稜線、標高110mの小頂上に所在する。糟屋郡須恵町大字須恵と植木の大字界となる所で、西側から南側に巡る視界が良好な地である。

月隈丘陵の東部、三郡山地に挟まれた区域に、多々良川水系宇美川・須恵川の両河川によって、形成された独立小平野がある。

この平野は、三郡山地と月隈丘陵に続く四王寺山とが南部で接する地形をとり、糟屋郡最南部にある宇美町原田付近を頂点として、北西方向になだらかに開ける扇状地平野といえる。

またこの小平野は、宇美川・須恵川沿いに更にそれぞれの平野部を形成し、そのほぼ中央部を低丘陵によって分割されている。

このような地形において、最深部に宇美町があり須恵川沿いに須恵町、その北側に篠栗町、宇美川下流に志免町その北部に粕屋町と下っていく。

西側の月隈丘陵は、宇美観音浦及び岩長浦古墳群<sup>(註1)</sup>などの群集墳が見られ、中央の低丘陵上には神領古墳群<sup>(註2)</sup>、光正寺<sup>(註3)</sup>・七夕池の両古墳が確認できる。

また、東端三郡山地若杉山から派生した小稜の麓部には須恵町城山古墳群、大塚古墳群、尾黒古墳群、更に独立丘上にあった乙植木古墳群<sup>(註4)</sup>などが見られ、篠栗側には上小路古墳群、粕屋町側には焼地山・井山両古墳群を見ることができる。

糟屋郡南部の、川によって形成された小平野を囲むように仕切る丘陵に散在する古墳群の解明は郡南の古代文化圏の貴重な資料となるであろう。

一方、文武天皇2年(698)銘妙心寺鐘に記された「糟屋評」、あるいは須恵器とのかかわりが推定される町名の「須恵」などまだ解明されていない周辺の問題ものこされている。

ヨムギ古墳はこのような小平野部の一角にあった。

註1 宇美町教育委員会「宇美観音浦」『宇美町文化財調査報告書』1981

註2 宇美町教育委員会「神領古墳群」『宇美町文化財調査報告書』1984

註3 福岡県教育委員会・志免町教育委員会『七夕池遺跡群—調査資料—』1974

註4 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』X 1977

須恵町教育委員会「乙植木古墳群Ⅱ」『須恵町文化財調査報告』第2集 1986



- |           |            |           |           |            |
|-----------|------------|-----------|-----------|------------|
| 1. ヨムギ古墳  | 2. 才木古墳    | 3. 乙植木古墳群 | 4. ヨシガ浦古墳 | 5. セ夕池古墳   |
| 6. 光正寺古墳  | 7. 柳坂古墳群   | 8. 尾黒古墳群  | 9. 大塚古墳群  | 10. 尾黒南古墳群 |
| 11. 城山古墳群 | 12. カヤノ古墳群 | 13. 切通古墳  |           |            |

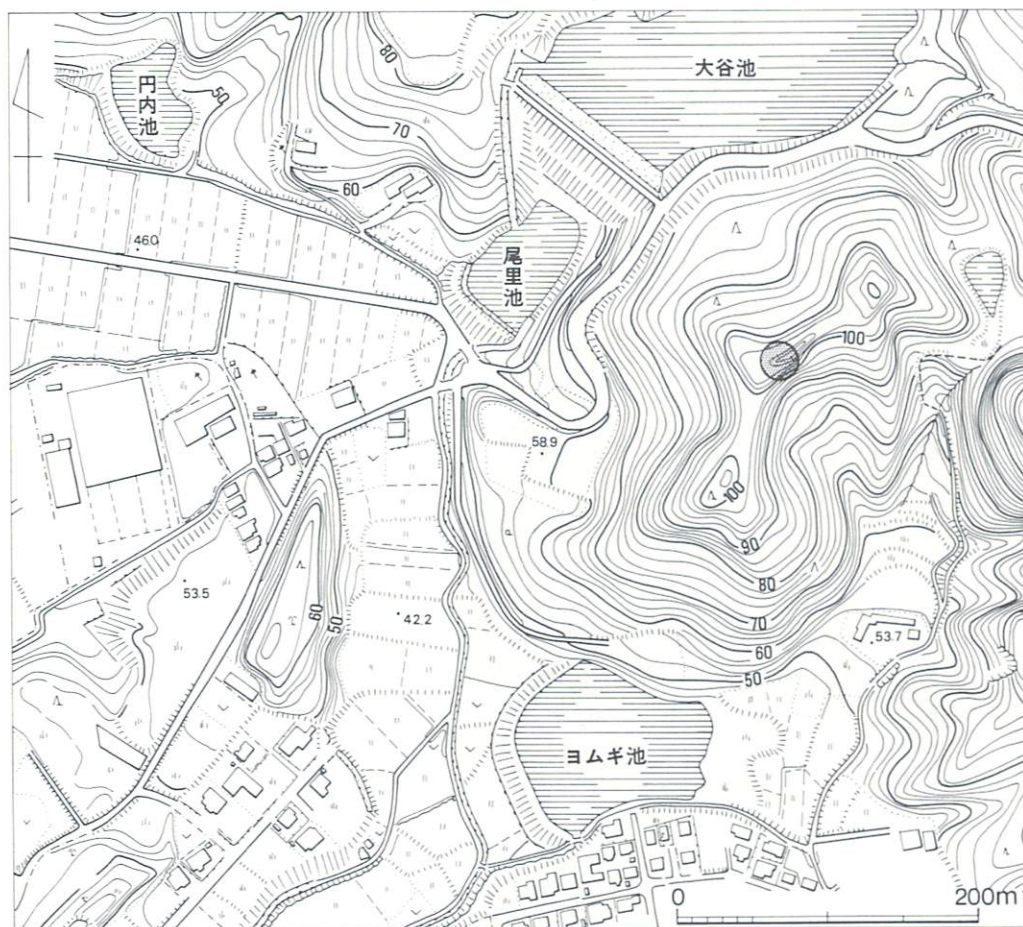
第1図 遺跡分布図 (縮尺1/25,000)



## Ⅱ 調査の内容

町教育委員会の分布調査で、造成地のほぼ中央の丘陵頂部付近で玄門部の天井石が露出した円墳が1基発見された。連絡を受けた県教育委員会では、教育事務所の担当職員を派遣しこの古墳を確認した。しかし、中学校建設に伴う造成計画面積は約6万㎡におよび、他にも埋蔵文化財が存在することが予測されたため、伐採後に再度詳細な分布調査と試掘調査を実施した。

古墳の所在する丘陵の尾根線には、他に2ヶ所高所が存在する。このうち南西側の1ヶ所は自然地形の高まりで、古墳築造に伴う地形の変換はまったく確認できなかった。北東側の高まりは以前送電線の鉄塔が建てられた所で、現状は方形の平坦面となっていた。周囲には多くの石があり古墳が破壊された可能性もあり、尾根線上にトレンチを設定し調査したが、古墳の遺構等は確



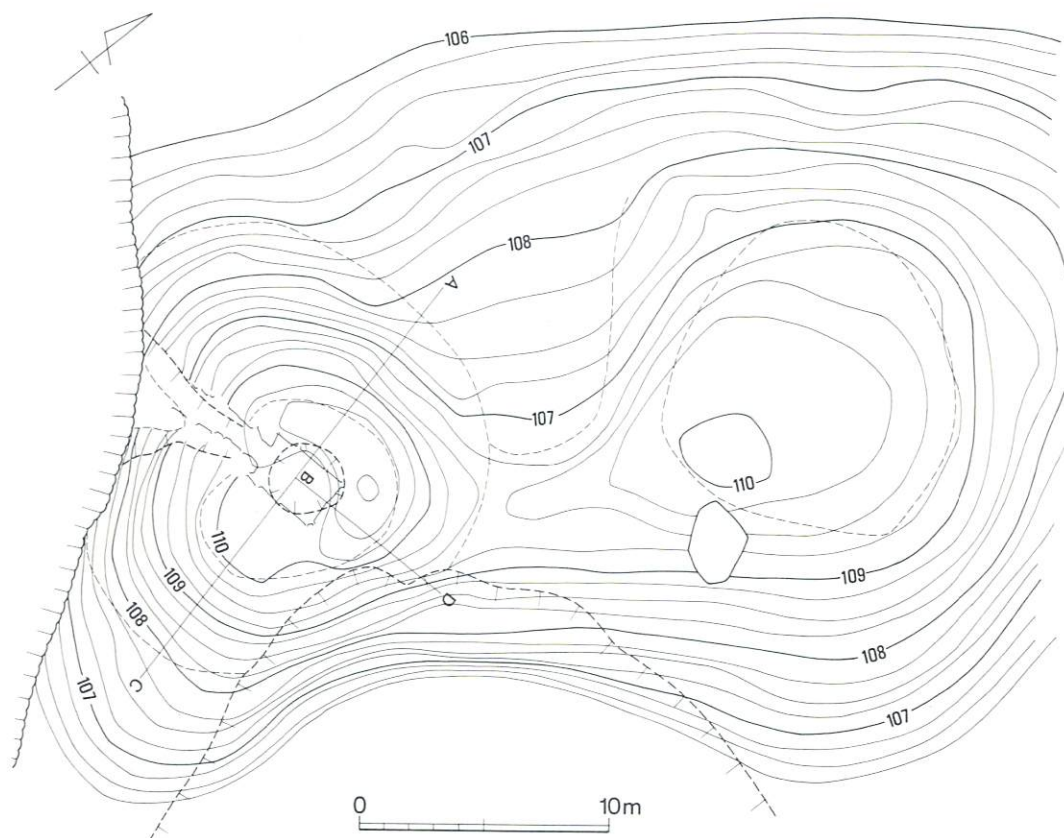
第2図 ヨムギ古墳位置図 (縮尺1/5,000)

認することはできなかった。丘陵の斜面は急で、古墳を築造する立地条件は整っていない。窯等の遺構も想定してトレンチを入れたが遺構等は存在せず、本墳は独立墳であることが判明した。

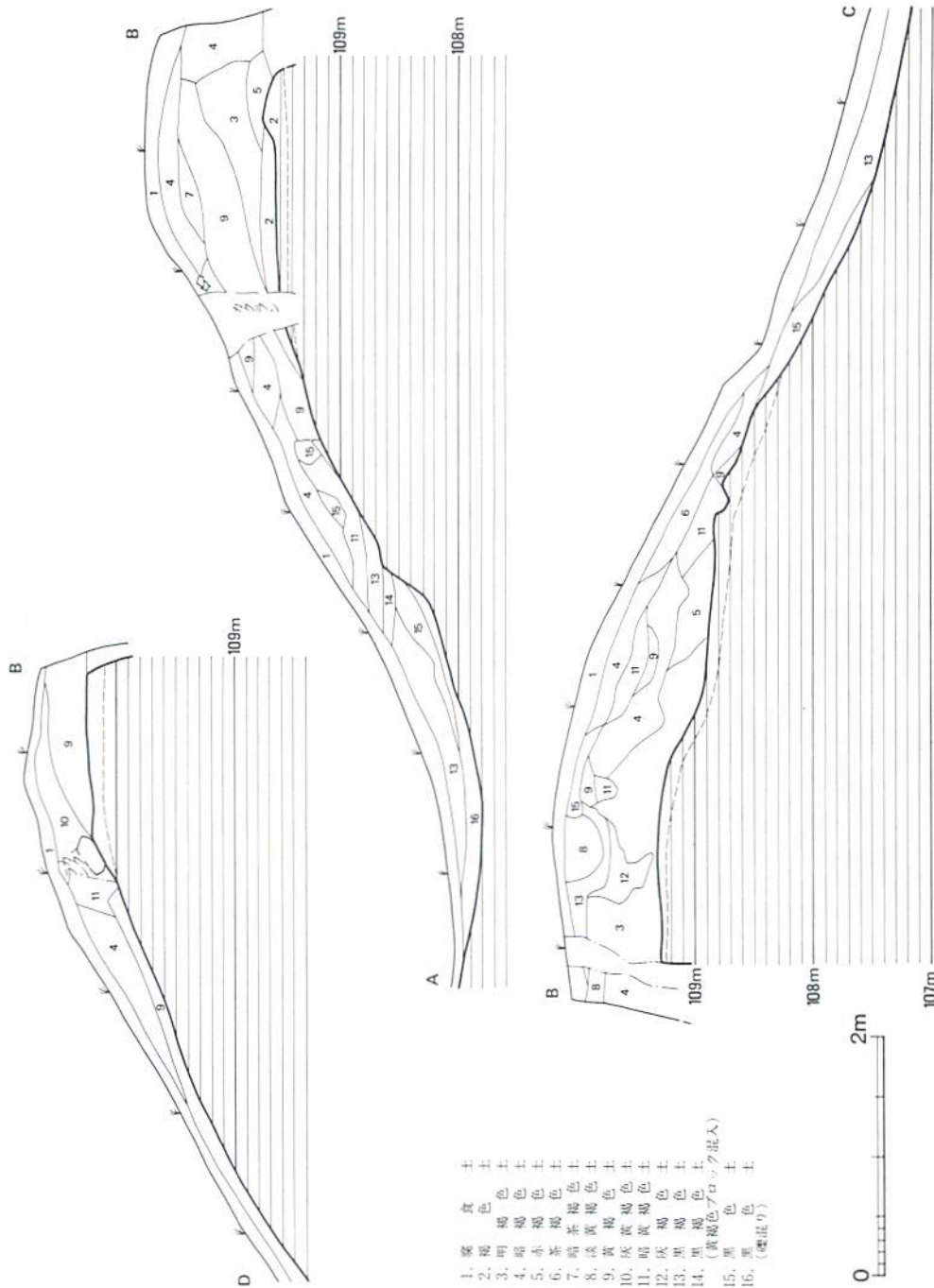
(1) 墳丘 (図版1~4, 第2~5図)

東側の岳城山(標高382m)から屈曲して南西にのびる丘陵頂部付近の標高約110mの高位置に構築された円墳である。眼下には須恵川の流れる平野を一望できる。丘陵西側下の水田面との比高は約60~65mを測る。

墳丘は南西裾部を調査直前の造成工事、南西側を土砂崩壊、西側を盗掘孔によって失っており、墳頂部は石室の石材抜きで大きく陥没していた。このため墳形の詳細は不明であるが、地



第3図 ヨムギ古墳地形測量図(縮尺1/300)



第4図 ヨムギ古墳墳丘土層図 (縮尺1/60)

形変換線の観察から、径17~18mの円墳であることが推定できた。高さは残りのよい北西側で1.60mを測る。

墳丘調査の結果、東西・南北とも約16mを測る円墳であることが判った。墳丘の築造は、まず円形プランの削出しが行われるが、墳丘北側は一部旧地表を残したまま整形が行われる。溝は墳丘の北側半分を走り、南に下るにしたがって、幅狭く、浅くなる。他の部分は墳形を際立たせるために墳裾の削出しにとどまる。

盛土は大きく2段階に分かれる。1段目は石室の石材を覆う形で盛られ、2段目は、これを覆い、さらに墳形を整える盛土である。墳丘基底部からの高さは、東側で0.55cm、南側で0.9cm、北側で1.1mを測る。墳丘の流出した部分を補足すると、現状より50~60cmほど高かったものと考えられる。墳丘基底部の削り出しは、石室中心から4m付近までは平坦で、以降は裾部に向かっ



第5図 地山面地形図(縮尺1/200)

て傾斜を強めるが、この境目の部分墳丘北側では、半円形状に列石が認められた。盛土の流出を防ぐ土留と墳形を整える役割を果たすものであろう。

北西側溝の盛土中と、墓道左側の重機によるカクラン部からは、須恵器・土師器片が多数出土した。ともに原位置は墓道左側の墳丘上と考えられる。

## (2) 主体部 (図版5～8, 第6図)

本墳の主体部は、主軸をN-77°-Eを示し、西側の平野部に向かって開口する単室の横穴式石室である。玄室は上部石積と天井石を失い、床面中央部の奥壁側が荒らされていた。羨道部天井石と閉塞部上部が破壊されていた。石室の全長は右壁で5.35m、左壁で6.0mを測る。使用された石材は雲母片岩である。

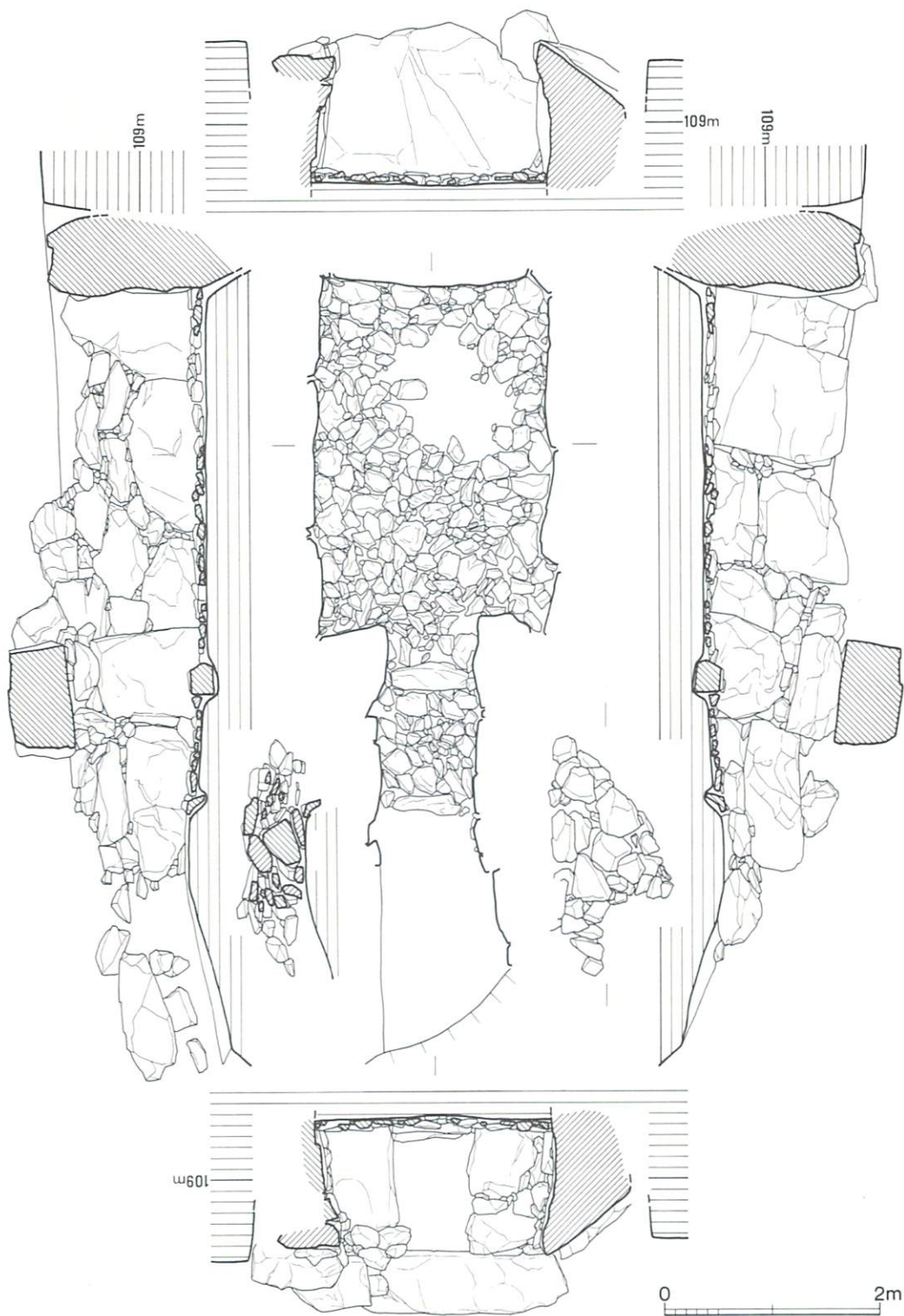
玄室床面の規模は、奥幅2.1m、前幅2.08m、右壁長3.1m、左壁長3.25mを測る長方形を呈する。奥壁は1枚岩、側壁は各3枚の石材を腰石とし、奥壁は約4°、左右壁約5°内傾させて立てている。左壁は4段目、右壁で3段目まで残るがともに奥壁側は1枚で3段分の高さを補う。2段目以上は小口積みして次第にせり出す構築法をとっている。床面からの現存高は、奥壁1.4m、左壁1.75m、右壁1.3mを測る。床面は、30～40cm大の礫を用いて全面に敷かれほぼ水平を保っている。

玄門は、左右袖ともに62cm玄室側壁から突出させている。玄門幅は85cmを測る。第一仕切石は、玄門の角から羨道側に約40cmのところ半分埋め込んだ状態で据えられている。両袖石の上には、小口積みした2段目の石材があり、この上に天井石が載せられている。玄門上幅60cm、仕切石上端からの高さは、1.08mある。

羨道は、第一仕切石から95cmの部分で閉塞されており、この部分に第二仕切石がある。この間には玄室と同様に全面に敷石を施す。両壁ともに3段目まで残るがほぼこの上部に天井石が載るものとする。最大幅は92cmを測り、玄門幅よりやや広く造られており、前室を意識したものと思われる。

石組墓道は、左壁長52cm、右壁長95cmを測り、幅はやや開き気味である。素掘墓道は、左壁側で約1.5mほど確認した。なお左壁部の石材は浮いた状態で原位置ではないと考える。

玄室及び羨道部からは、耳環・勾玉・ガラス小玉・土玉・鉄鏃・馬具・刀子・鉄斧・須恵器・土師器が出土した(図版9～11)。羨道部の出土状態は、土器類が左壁側に重ね置かれて、鉄器類が右壁側に集中した状態で副葬されていた。



第6図 ヨムギ古墳石室実測図（縮尺1/60）

(3) 出土遺物

(図版12~20、第7~24図)

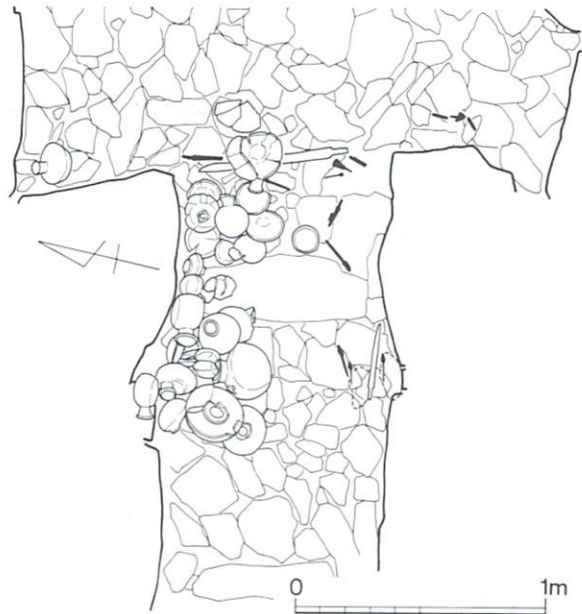
装身具 (図版12、第7~9図)

耳環 (1~9) 9個検出された。

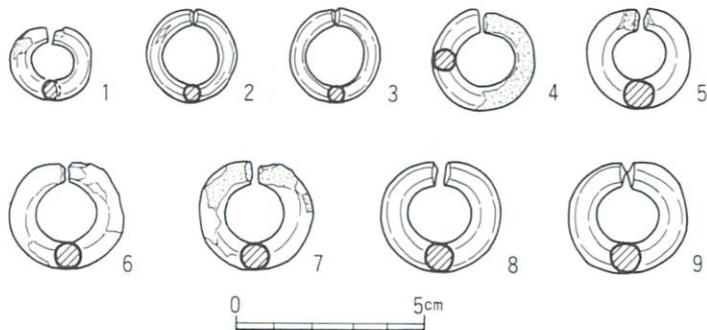
2・5・6・8・9は玄室床面から、他は石室埋土中からの出土である。1は、長径21.8mm、短径19.3mm、断面5.5mm×4.3mmの楕円形の金環で風化が進んでいる。重量は1.5g。2・3は金環で法量は同規模で対であろう。共に金色の鮮やかな光沢を保っている。2は、長径24.7mm、短径23.9mm、断面4.4mmの円形で、重量は6.8g。3は、長径25.0mm、短径23.8mm、断面4.5mmの円形で、重量は6.85g。4は、金環で風化が著しい。長径27.4mm、短径26.4mm、断面6.25mm×5.7mmの楕円形で、重量は7.9g。5は、銀環で、長径27.6mm、短径26.45mm、断面8.7mm×7.4mmの

楕円形で、重量は17.7gを測る。内側は白銅色で光沢を保つ。6・7は共に銀環で法量からみて対であろう。表面の風化が進んでいる。6は、長径3.3mm、短径27.8mm、断面7.4mm×7.0mmの楕円形で、重量は14.6gを測る。7は長径32.0mm、短径28.7mm、断面7.9mm×7.3mmの楕円形を呈し、重量16.5gを測る。8・9は共に銀環で対であろう。表面は錆でおおわれている。8は、長径31.7mm、短径28.6mm、断面8.0mm×7.2mmの楕円形で、重量21.2gを測る。9は、長径32.1mm、短径28.9mm、断面8.3mm×7.8mmのやや角ばった楕円形を呈する。重量は20.9gである。

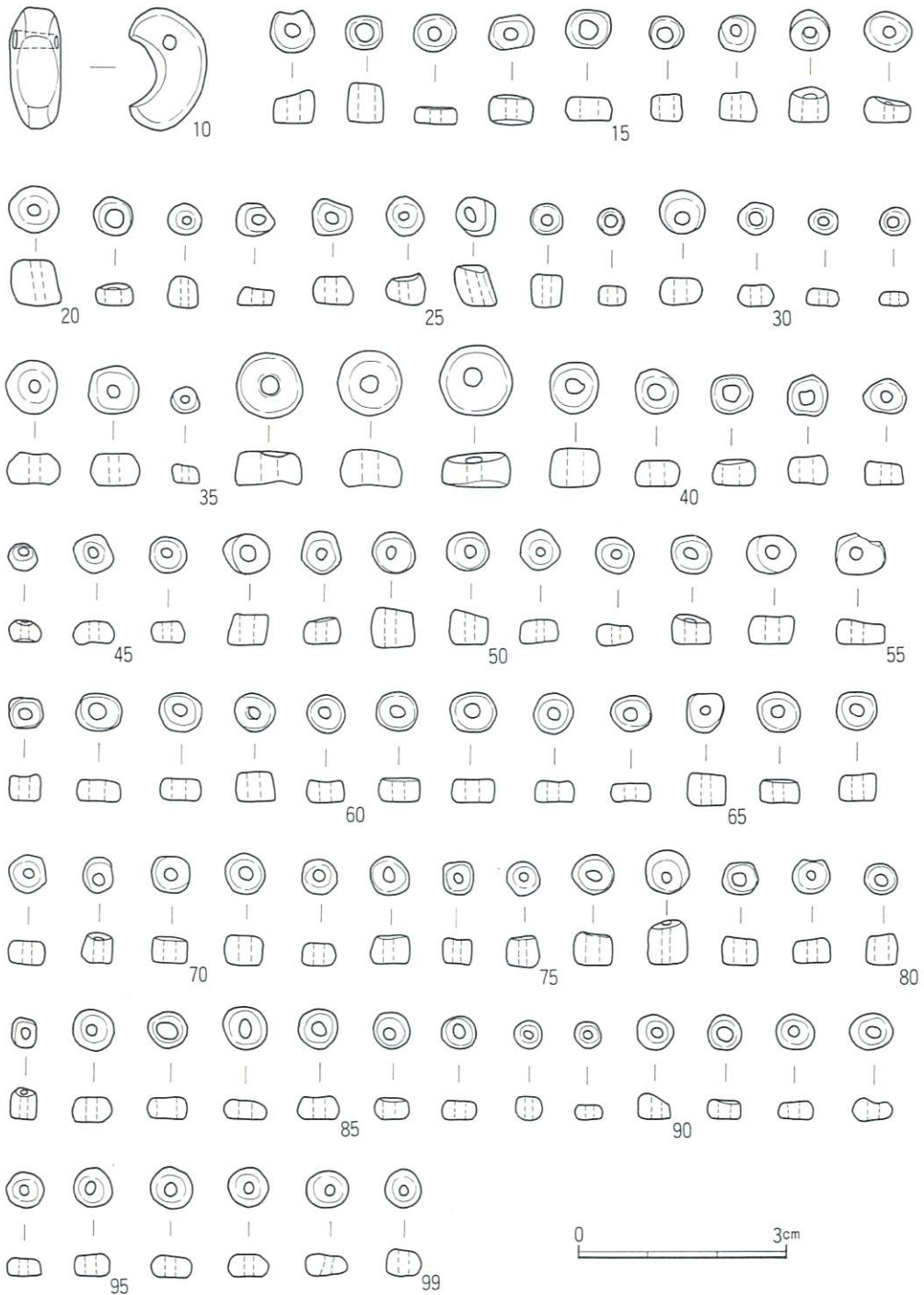
勾玉 (10) 淡緑色の硬玉質の勾玉で全体に丸味をもちC字形を呈する。長さ16.9mm、厚さ6.8mm、幅6.7mm、重さ2.0gを測る。孔は片面から主に穿たれ、孔径は一方が2.85mm、他方が1.95mmである。



第7図 遺物出土状態実測図 (縮尺1/30)

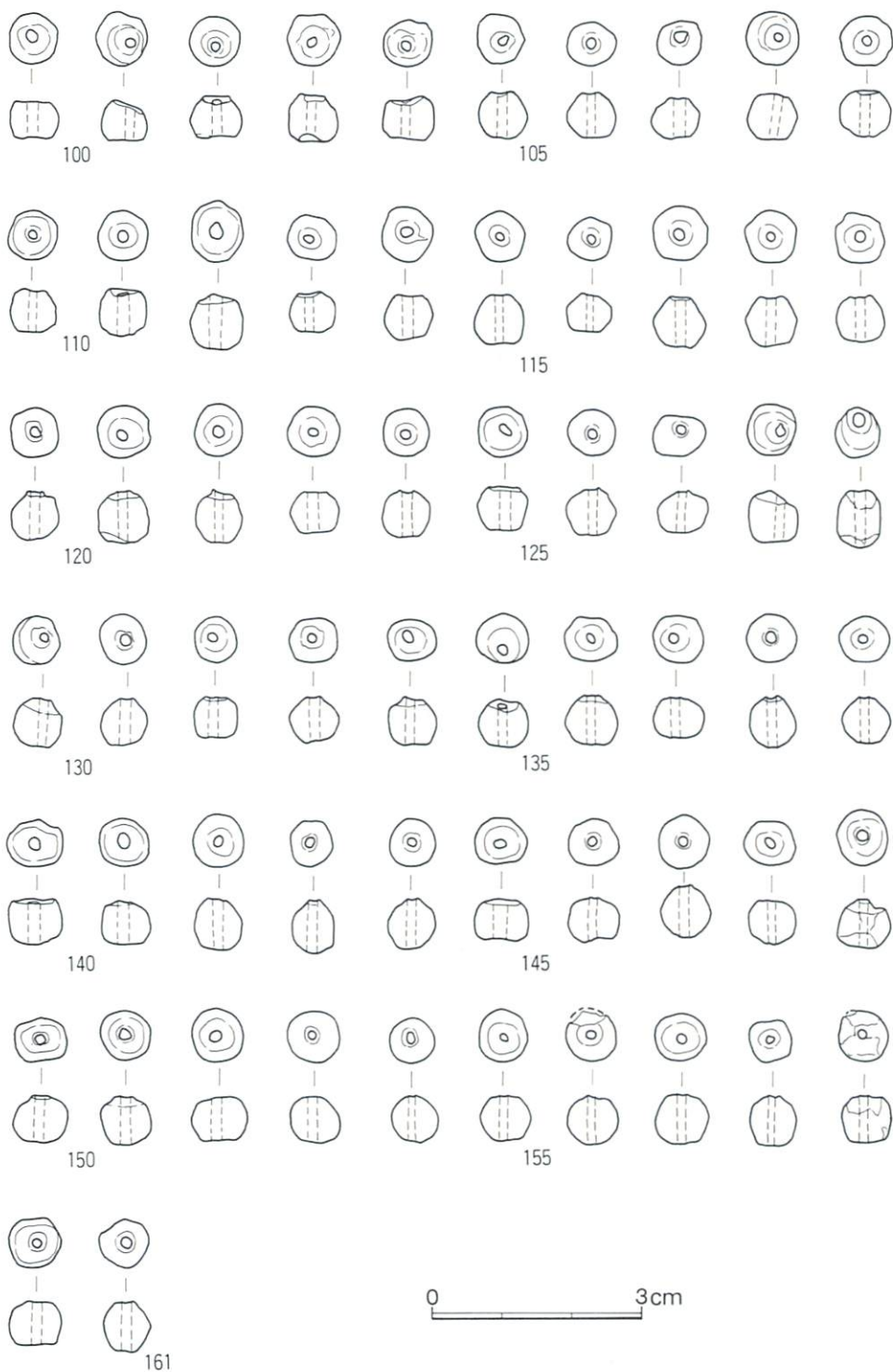


第8図 耳環実測図 (縮尺1/2)



第9図 ガラス小玉実測図(実大)





第10図 土 玉 実 測 図 (実大)

表1 ガラス小玉計測表

(単位: mm)

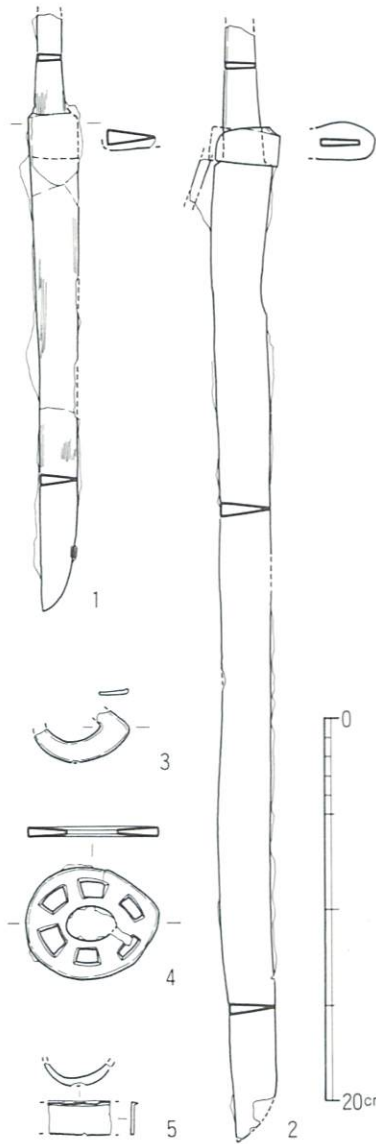
No.	径	厚	孔 径	色 調	No.	径	厚	孔 径	色 調
11	6.33	4.8	2.11	コバルトブルー	56	6.7	3.45	1.7	コバルトブルー
12	5.42	5.39	2.28	スカイブルー	57	6.4	2.85	2.2	"
13	5.56	2.62	2.4	コバルトブルー	58	6.2	3.25	2.1	"
14	6.24	4.21	1.85	"	59	5.9	4.35	2.1	"
15	6.58	3.35	2.52	スカイブルー	60	5.5	3.35	1.45	"
16	4.88	3.9	2.14	"	61	6.15	3.45	2.15	"
17	5.2	4.32	1.67	コバルトブルー	62	6.7	3.5	2.2	"
18	5.05	4.48	2.27	"	63	5.75	3.15	1.8	"
19	6.78	3.95	1.67	茶	64	6.0	2.7	2.1	"
20	7.12	6.5	1.81	黄緑	65	5.4	4.5	1.45	"
21	5.37	3.21	2.7	コバルトブルー	66	5.6	3.15	1.85	"
22	4.9	4.12	1.44	スカイブルー	67	6.15	4.1	2.15	"
23	4.92	2.88	1.88	コバルトブルー	68	5.4	3.45	1.55	"
24	5.88	4.11	1.79	"	69	5.1	4.1	1.8	"
25	5.42	4.78	1.32	"	70	5.3	3.4	1.6	"
26	5.33	5.53	2.44	"	71	5.7	4.2	2.1	"
27	4.25	4.7	1.38	"	72	5.0	3.2	1.5	"
28	3.74	2.82	1.63	ブルーグリーン	73	5.6	4.0	1.9	"
29	6.57	3.79	2.0	"	74	4.5	3.7	1.45	"
30	5.31	3.58	1.9	"	75	4.9	4.3	1.4	"
31	4.31	2.83	1.6	コバルトブルー	76	5.55	4.4	2.25	"
32	4.5	2.22	1.89	"	77	6.0	6.1	1.2	"
33	7.7	4.32	1.6	ブルーグリーン	78	5.3	3.7	1.9	"
34	6.74	4.55	1.88	"	79	5.3	3.75	1.45	"
35	4.0	3.1	1.26	コバルトブルー	80	5.0	4.6	2.1	"
36	9.25	4.54	2.51	"	81	4.95	4.0	1.4	"
37	8.73	4.7	2.49	ブルーグリーン	82	6.05	3.65	1.7	"
38	10.04	5.16	2.57	"	83	5.6	3.5	2.7	"
39	7.16	5.27	2.69	スカイブルー	84	6.2	2.9	2.15	"
40	6.52	3.73	2.44	コバルトブルー	85	5.95	3.5	2.4	"
41	5.75	3.48	2.88	"	86	5.15	3.55	1.9	"
42	5.75	4.26	2.17	"	87	5.25	2.9	1.8	"
43	6.0	3.4	1.65	"	88	3.25	3.3	1.25	"
44	4.4	2.9	1.2	"	89	4.1	2.55	1.55	"
45	5.8	3.45	1.45	ブルーグリーン	90	5.6	3.75	1.6	ブルーグリーン
46	5.0	3.4	1.45	コバルトブルー	91	4.8	2.9	2.15	"
47	5.65	4.35	2.15	"	92	5.4	2.65	1.6	"
48	5.5	4.0	1.65	"	93	5.8	3.0	1.8	"
49	6.1	5.4	1.9	"	94	5.5	2.75	1.65	"
50	6.1	4.35	1.5	"	95	5.5	3.35	1.8	コバルトブルー
51	5.9	3.25	1.25	ブルーグリーン	96	5.8	2.25	1.7	ブルーグリーン
52	5.6	3.1	1.35	"	97	5.5	3.1	1.7	"
53	5.5	3.6	2.0	コバルトブルー	98	5.8	3.25	1.7	"
54	6.3	4.0	1.9	"	99	5.25	3.6	1.45	"
55	5.0	3.2	1.6	"					

表2 土玉計測表

(単位: mm)

No.	径	厚	孔 径	No.	径	厚	孔 径	No.	径	厚	孔 径
100	7.3	5.25	2.0	121	7.35	7.0	1.65	142	7.1	6.55	1.7
101	7.45	5.55	1.8	122	7.1	6.6	1.7	143	6.25	7.7	1.9
102	7.45	5.55	1.55	123	7.4	5.3	1.75	144	6.6	6.5	1.6
103	7.15	6.1	1.6	124	6.7	6.3	1.5	145	8.0	6.3	2.0
104	7.55	6.1	1.5	125	7.0	5.75	1.7	146	7.25	5.95	1.8
105	6.8	6.0	1.7	126	7.05	6.1	1.6	147	7.45	6.9	1.8
106	7.5	6.4	1.65	127	7.3	5.7	1.55	148	7.0	5.85	1.65
107	6.8	5.3	1.8	128	8.0	6.5	1.75	149	7.3	6.6	1.6
108	7.5	6.35	1.45	129	6.5	7.5	1.8	150	7.4	6.45	1.7
109	7.5	5.85	1.55	130	6.8	6.25	1.4	151	7.15	6.6	1.6
110	7.15	6.0	1.4	131	6.7	6.1	1.8	152	7.5	6.2	1.7
111	7.15	5.9	1.6	132	6.5	5.35	1.7	153	7.55	6.5	1.6
112	8.1	7.3	1.9	133	7.0	5.95	1.3	154	6.8	6.05	1.6
113	7.1	6.65	1.7	134	6.6	6.0	1.7	155	7.0	6.15	1.2
114	7.45	6.8	1.6	135	7.3	6.2	1.55	156	7.2	6.65	1.45
115	7.5	6.3	1.35	136	7.1	6.25	1.7	157	7.5	6.75	1.75
116	6.8	5.85	1.65	137	6.9	5.6	1.65	158	7.15	6.85	1.25
117	7.9	6.75	1.7	138	6.8	7.1	1.8	159	7.0	6.2	1.45
118	7.3	6.4	1.8	139	7.2	5.9	1.7	160	7.55	6.15	1.55
119	7.2	6.2	1.45	140	8.0	5.75	1.85	161	7.0	7.0	1.65
120	7.2	6.3	1.8	141	7.15	5.5	2.0				

ガラス小玉（11～99） 総数で89点が出土した。石室床面及び埋土中からの出土で連なった状態は観察できなかつた。色調は、コバルトブルー、ブルーグリーンが主で、スカイブルー、茶色、黄緑色を呈するものが数点ある。径は3.25～10.04mmまでであるが5mm前後のものが多い。形態的には、厚さ3～4mmで上下が平滑になるものと、径に比べて厚みある特徴を示すものがある。一連の糸に通すと約30cm程になる。総重量は15.7gある。全体の計測値は表1に示すとおりである。



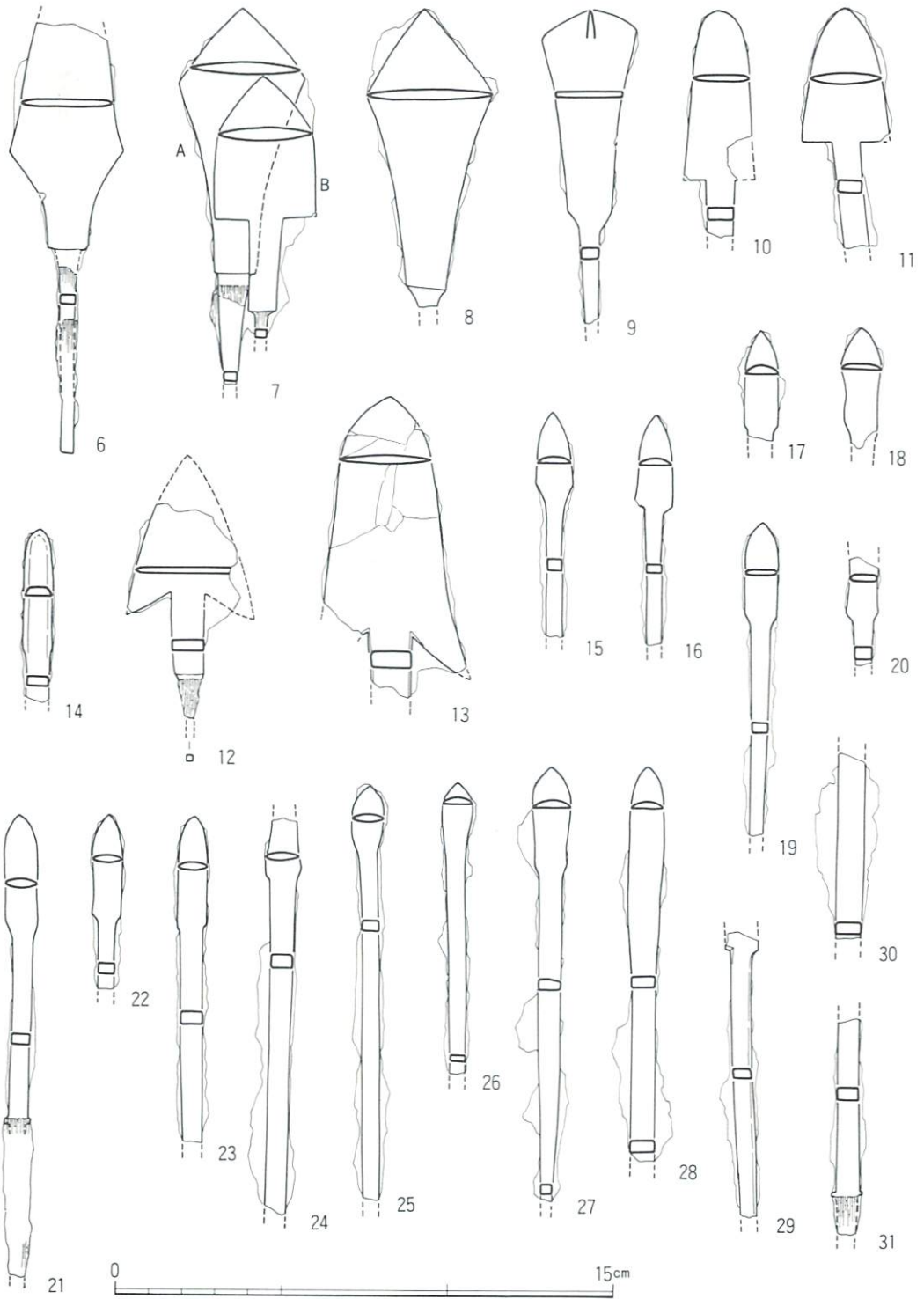
第11図 鉄製品実測図  
(縮尺1/4)

土玉（100～161） 総数62点を数える。出土状態はガラス小玉と同様で連なった状態は観察できなかつた。色調は黒色を呈する。漆ぬりであろうか。大きさは、径7mm、厚さ6mm前後と粒揃いであるが、個々に観察すると製作過程でつけられたにぶい角が目につく。孔径は1.7mm前後でほぼ一定している。巻きつけてつくられ棒から引きぬく時に出きたものであろうか一方の孔の端にわずかではあるが突起が認められるものがある。一連の糸に通すと約36.5cmを測る。総重量は18.2gである。全体の計測値は表2に示すとおりである。

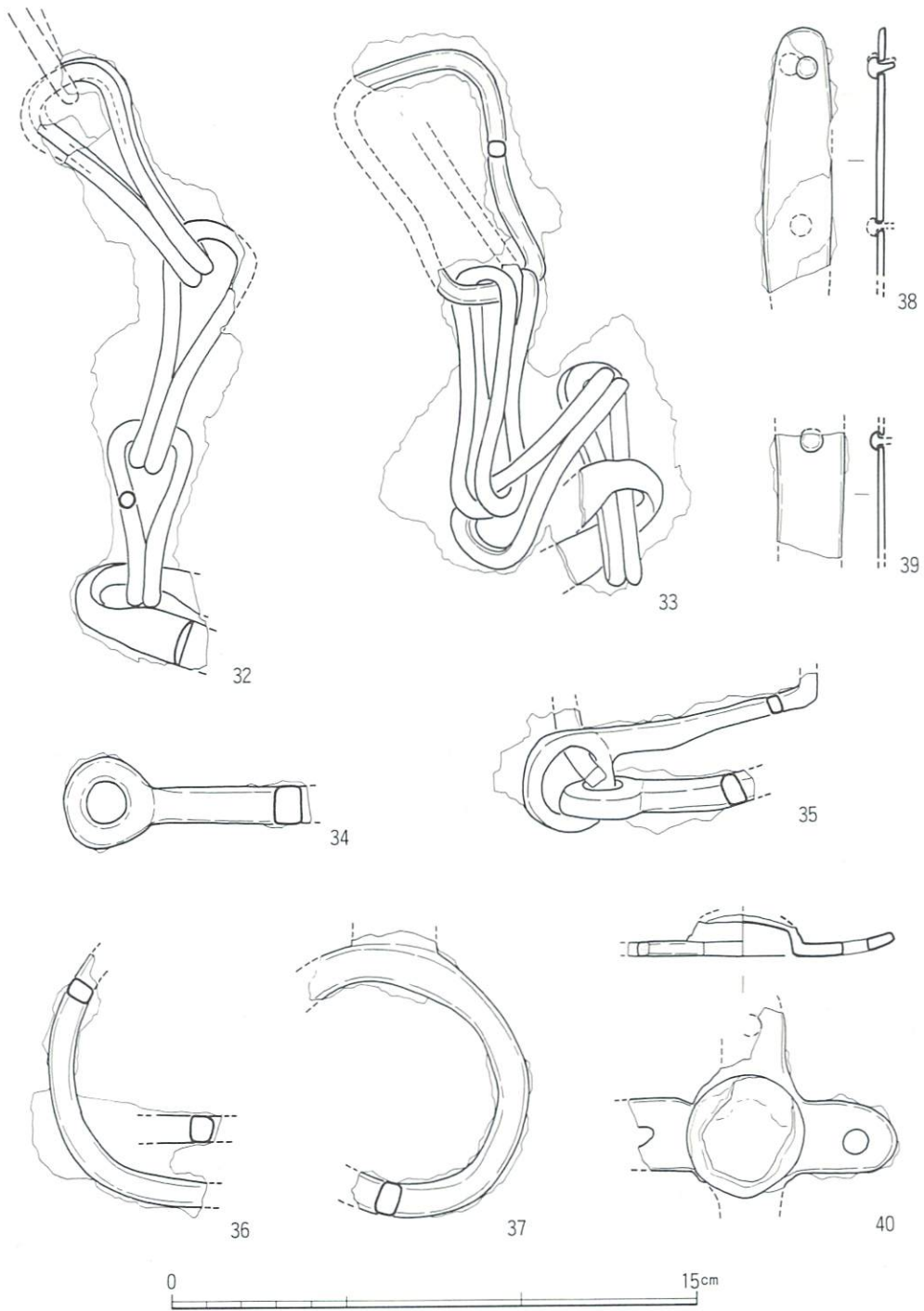
#### 鉄器（図版13～15、第10～13図）

武器（刀・鎌・弓付属金具）、馬具（鐙・轡・留金具・辻金具）、工具（刀子・斧）が出土した。

刀（1～5） 1の刀は羨道右側壁第1仕切石付近の敷石上から鋒を玄門に向けた状態で検出した。茎の先端部を欠く。現存長31cm、身部長25.7cmを測る。身は関から鋒の方へ次第に幅を狭め、関部で幅2.7cm。茎は中央で1.3cmで、断面形は長方形で刃側がやや薄い。目釘穴は錆と残存する木質のため明確でない。関部に縁金具が付くと思われるが錆のためはっきりしない。2の刀は玄室の玄門近くの敷石上から刃部を奥壁側に向けた状態で検出した。上に平瓶がのる。平造りで身部は内反りしている。鋒の一部と茎の先端を欠く。現存長58.3cm、身部長51cm、刃部幅は関部3.1cm、現存茎長7.3cm、同幅は関側で2.1cmを測る。錆のため明確ではないが縁金具が認められる。幅は2cm弱であろう。鏝は大小2種ある。3は長径5.1cm程であろう。厚さ2



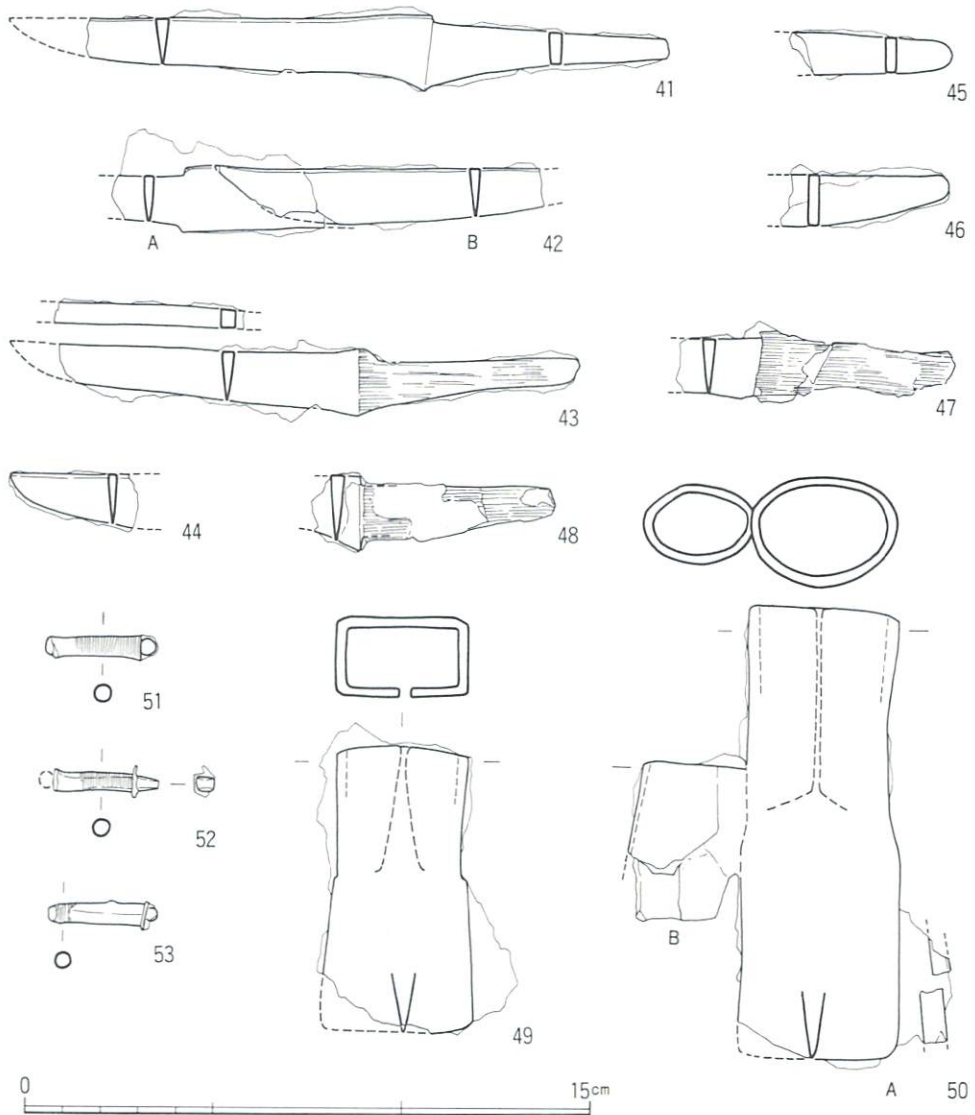
第12図 鉄製品実測図 (縮尺1/2)



第13図 鉄製品実測図(縮尺1/2)

mm。4は長径7.0cm、短径6.0cmで周囲に略長方形の透しが入る。5は、縁金具である。

鉄 鎌 (6~31) 大きく広根式と細根式がある。6・7 A・8は定角形で、7は鋒と基部の一部を欠く、現存長12.7cm。基部には木質が残る。7 AはBの五角形式と錆着する。基部に木質が残る。現存長11.0cm。8は茎を欠く。現存長8.8cm。9は圭頭式で茎を欠く。現存長9.3cm。10・11は三角式で逆刺をもたない。現存長は10が6.7cm、11が7cm。12・13は逆刺をもつもので、12は逆刺は浅く、篋被をもつ。現存長6.3cm、木質が残る。13は、一方逆刺と茎を欠く。現存長8.8cm。錆のため明確ではないが、細長い透しが入るかもしれない。14は片丸切刃式である。15~



第14図 鉄製品実測図(縮尺1/2)

27は、鋒から関へすっと伸びるもの（15～17・19・23）と、鎌身部中央でわずかに幅の狭まるもの（18・21・22・24・27）とがある。断面形は片丸造り（15～18・26・27）と、両丸造り（21～25）がある。19・20の断面形は両側が平らに近い。28は片丸造りで関をもたない。

鐙（32・33） 両者とも鐙本体は残っていない。3連の兵庫鎖で対になる。32の鎖端部に付く金具は形から鎖の欠損したものではなく、鐙本体に接続する部品と思われる。33には鉸具が連結している。

轡（34～35） 34は銜の連結部分と思われる。現存長7.0cm、断面は方形を呈す。35は銜・引手金具が錆着している。鏡板は引手の内側につく。

鏡板（36・37） とともに鉄製素環鏡板である。37は錆で明確ではないが立聞が若干遺存している。36には別個体（鎌？）が錆着している。

留金具（38・39） 38は厚さ2mmの鉄地の上に3個の鉸が打たれていた。端部は丸身をもつ。39は両端部を欠く。厚さ2mmの鉄地に1個の鉸が認められる。

辻金具（40） 中央体部は径3.5cmの半球形を呈する。足金具は4個つくが残存状態は悪い。脚長は2.6cmを測る。鉸は残存しない。

刀子（41～48） 41は鋒を欠損しており、現存長15.4cmを測る。両関造りである。刃部はかなり使い込んだものと思われ、刃部は摩り減っている。茎長6.2cm。42は2本の刀子が錆着している。Aは両関造りである。43は鉄鎌片が錆着している。鋒を欠損している。現存長は13.8cm、身幅は断面部分で1.3cm。茎長5.9cmを測る。44は鋒片。45・46は茎片である。47・48は一部刃部を残す。

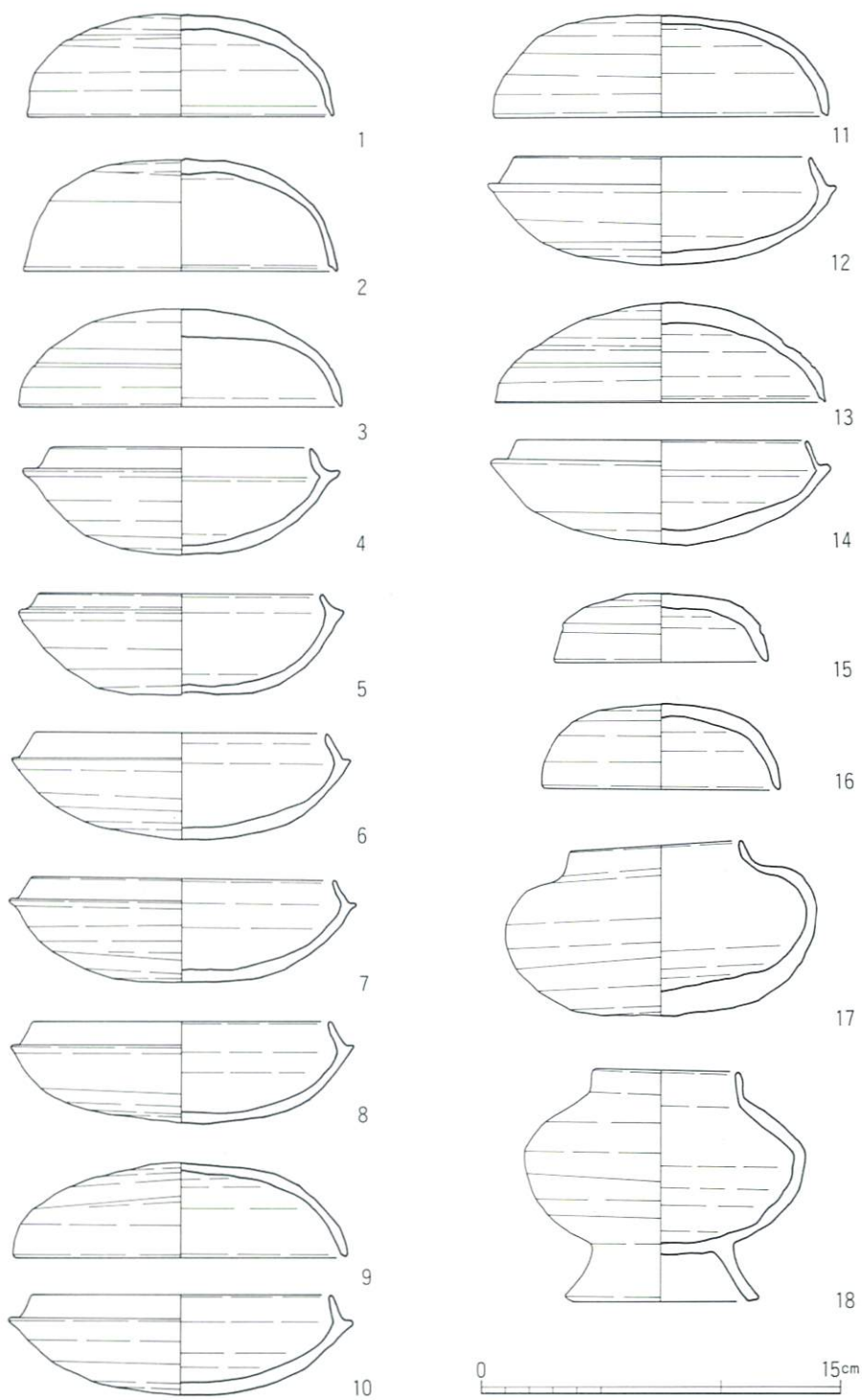
斧（49・50） 長さ7.5cm、幅は袋部で3.5cm、刃部幅は欠損と錆で明確ではないが4cm程度であろう。袋部の厚さは2.1cm、断面形は長方形を呈す。袋部の折り曲げ状態は錆のため不明。50は2本の斧と鎌片が錆着している。Aは、長さ11.7cm、幅は袋部で4cm、刃部で4.2cmを測る。袋部の断面形は楕円形を呈し、短径2.8cmを測る。袋部の折り曲げ状態は錆のため明確でない。Bは袋部片で断面形は楕円形を呈し、長径約3cm、短径2.1cmを測る。

弓付属金具（51～53） 3本出土した。51は長さ3.0cm、径は0.5cm。52は2.8cm、径は0.4cm。一方の頭を欠損していると考えられ、復原長は3.2cm程度であろう。図示した突起は花卉であろう。53は長さ2.9cm、径0.4cmを測る。いずれも長軸に直交する木質を観察できる。

#### 出土土器（図版16～20、第15～25図）

石室内及び羨道部から、須恵器（杯蓋・杯身・蓋・提瓶・平瓶・短頸壺）、土師器の高杯が出土した。また奥壁に向かって左側の墳裾部及び墳丘表土からは、須恵器（杯蓋・杯身・平瓶・高杯・壺・甕・甗・器台）、土師器（高杯・壺）が出土、総数84個体である。以下説明を加える。

#### 玄室及び羨道部出土土器



第15図 出土土器実測図① (縮尺1/3)



## 須 惠 器

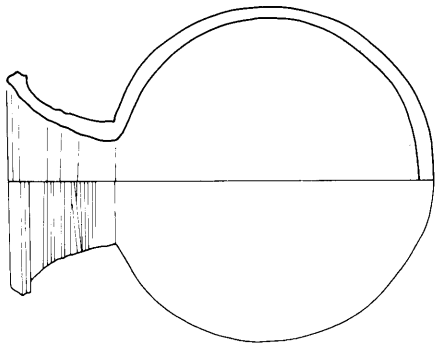
蓋杯・蓋（1～3、9・10・13） 口径12.4cm～13.8cm、器高3.9cm～4.6cmの大きさである。1・11・13は完形品、他は口縁部をわずかに欠損する。1・2は他に比べて、天井部が高く、丸味が少ない。天井部と体部の境は丸くつくられる。口縁部の形態はバラエティーに富む。口縁端部内面に、わずかな段を有す。1は天井部と体部の境に浅い沈線が巡る。13は窪みをもつ。調整はいずれも同様で、天井部外面は、回転ヘラ削り、内面はナデ。口縁部内・外面はともにヨコナデ調整を施し、焼成は良好である。

蓋杯・身（4～8、10・12・14） 口径は、4が10.9cmと最も小さく、他は11.9cm～12.6cmとほぼ一定する。器高は大差なく、4.1cm～4.4cmの内に収まる。立上りは、5が0.7cm、12が1.2cm、他は1.0cmで、短く内傾し、端部は丸くつくられる。受け部はほぼ水平である。底部から体部にかけて全体に丸味をもつ。調整はいずれも同様で、底部外面は回転ヘラ削り、内面はナデ、他はヨコナデ調整。10と14の内面に、ヘラ記号を施す。4は口縁部がわずかに欠けるだけで他は完形品、焼成は良好で堅固である。9と10、11と12、13と14はセットである。

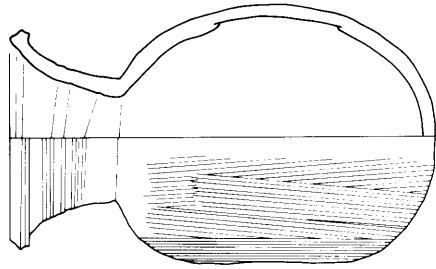
蓋（15・16） 15は、口径8.9cm、器高2.8cmを測る完形品。天井部は浅く、やや平坦である。天井部と口縁部の境に窪みをもち、口縁は外傾し端部は丸くつくられる。天井部外面は回転ヘラ削り、内面はナデ、他はヨコナデ調整。16は、口径9.9cm、器高3.5cmを測る完形品である。天井部から口縁部にかけて全体に丸味をもつ。口縁端部も丸い。天井部外面は回転ヘラ削り、内面はヨコナデの後ナデ、他はヨコナデ調整。ともに焼成は良好である。

短頸壺（17・18） 17は、口径7.2cm、器高7.2cm、体部最大径13.0cmを測る完形品である。口縁部は内傾し短く立上り、端部は丸い。体部は丸くつくられ、底部は厚い。底部から体部下位までは回転ヘラ削りを行う。内面はナデ、他はヨコナデ調整。灰色を呈し、焼成は良好。18は脚台付のもので、口径6.1cm、器高9.5cm、脚高2cm、体部最大径11.1cmを測る完形品である。底部外面と脚はヨコナデ、体部中位までは回転ヘラ削りが行われ、脚の接合部付近は回転ヘラ削り、後をナデ調整。内面は底部から体部中位まではナデ、他はヨコナデ調整される。灰色を呈し、焼成は良好。17は16と、18は15とセット。

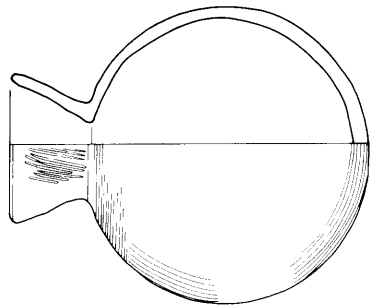
提 瓶（19～29） 11点出土した。小形（19）・中形（20～26・29）・大形（27・28）の3種に分けられる。19は口径5.8cm、器高14.4cmを測るもので、口縁部はほぼ直に上外方にのび、端部は丸くつくられる。胴部の背面も丸味をもつ。全面にカキ目を施すが、前面はナデ消された部分が認められる。灰色を呈し、焼成良好。中形品の口径は6.1cm～8.9cm、器高は16.9cm～18.6cmの大きさである。24・25は口縁部の3/4、26・29は口縁部を把手を欠失するが、他は口縁端部がわずかに欠ける程度でほぼ完形である。口縁部の形態は25のほかは同様で、外反して上外方にのび、端部は肥厚させてつまみ出される。25はやや内湾気味に立上り、端部では直立する。20の頸部には二条の沈線が施される。胴部背面は、平坦なもの（21）、平坦面を有するがやや丸味をもつもの



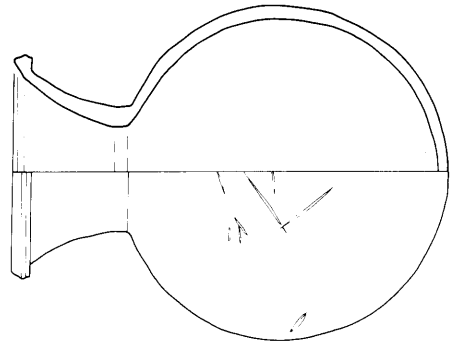
20



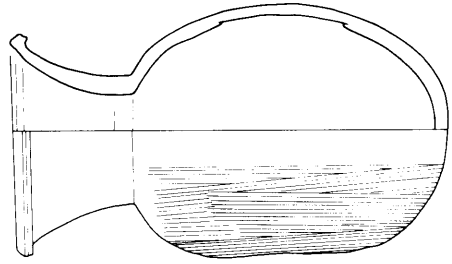
19



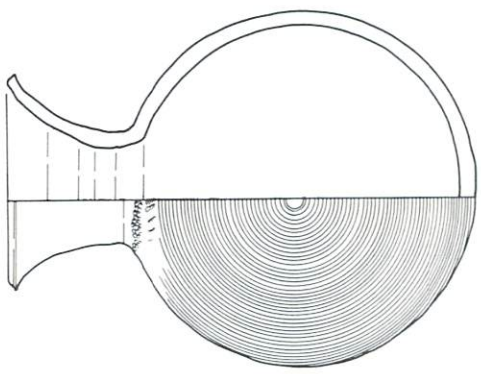
21



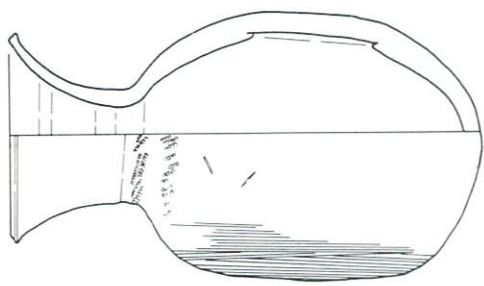
22



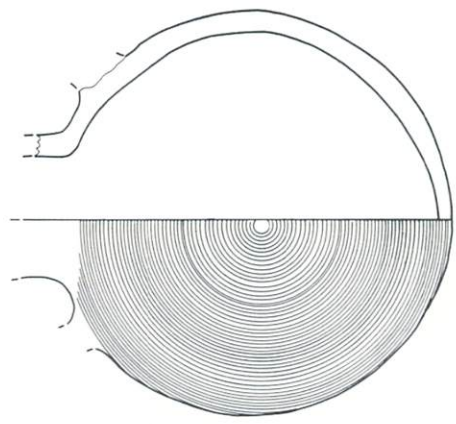
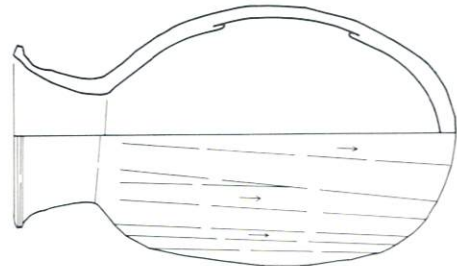
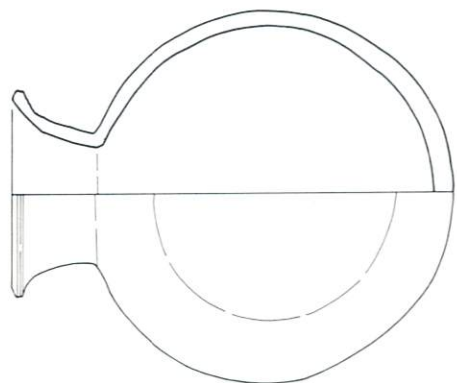
第16图 出土土器实测图② (縮尺1/3)



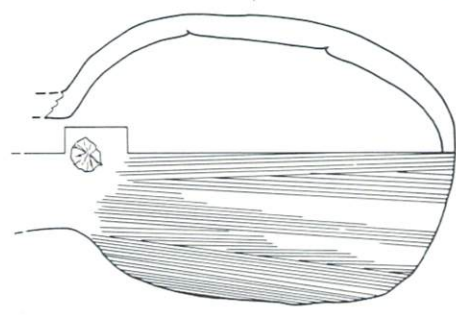
24



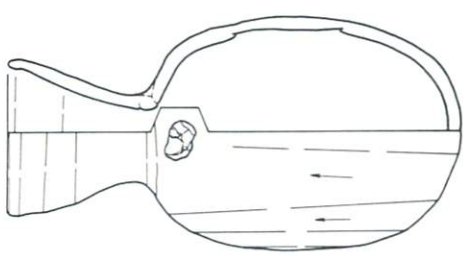
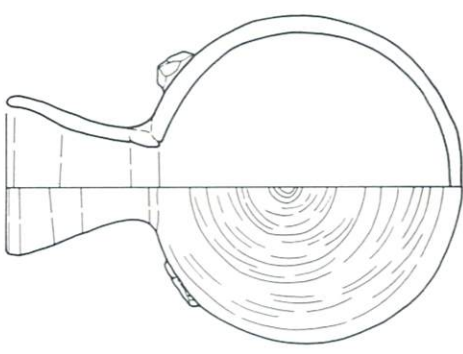
23



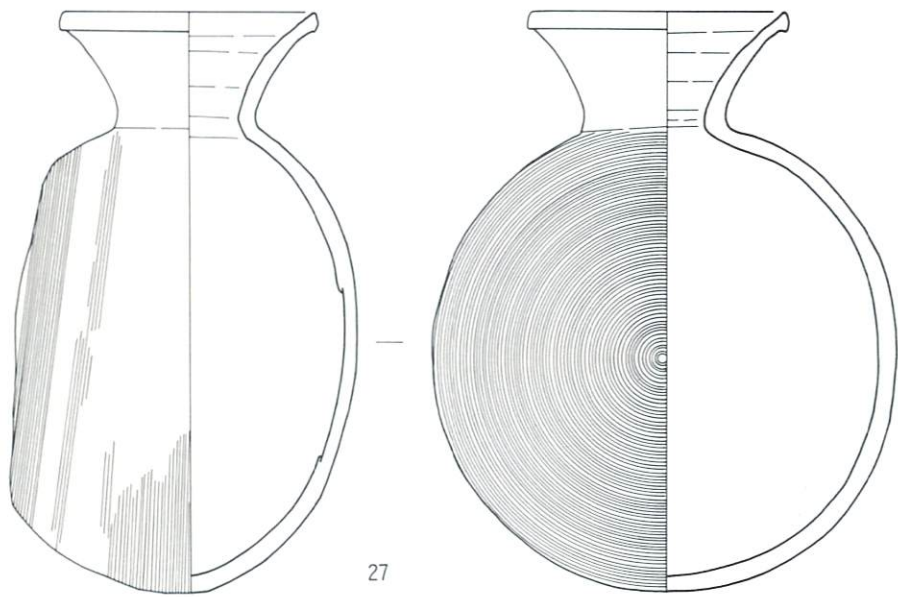
26



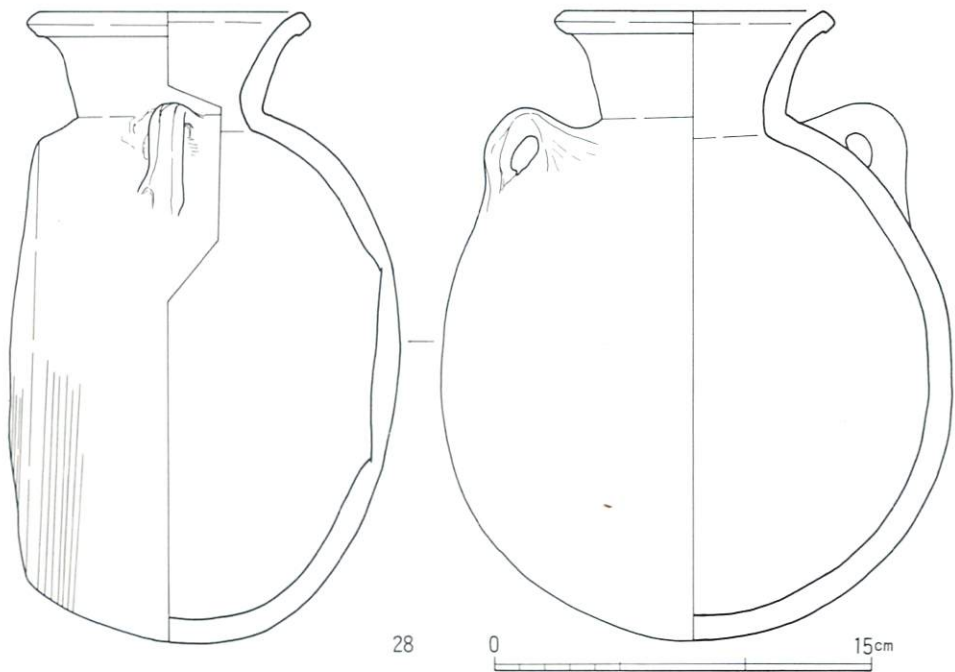
25



第17图 出土器实测图③ (缩尺1/3)



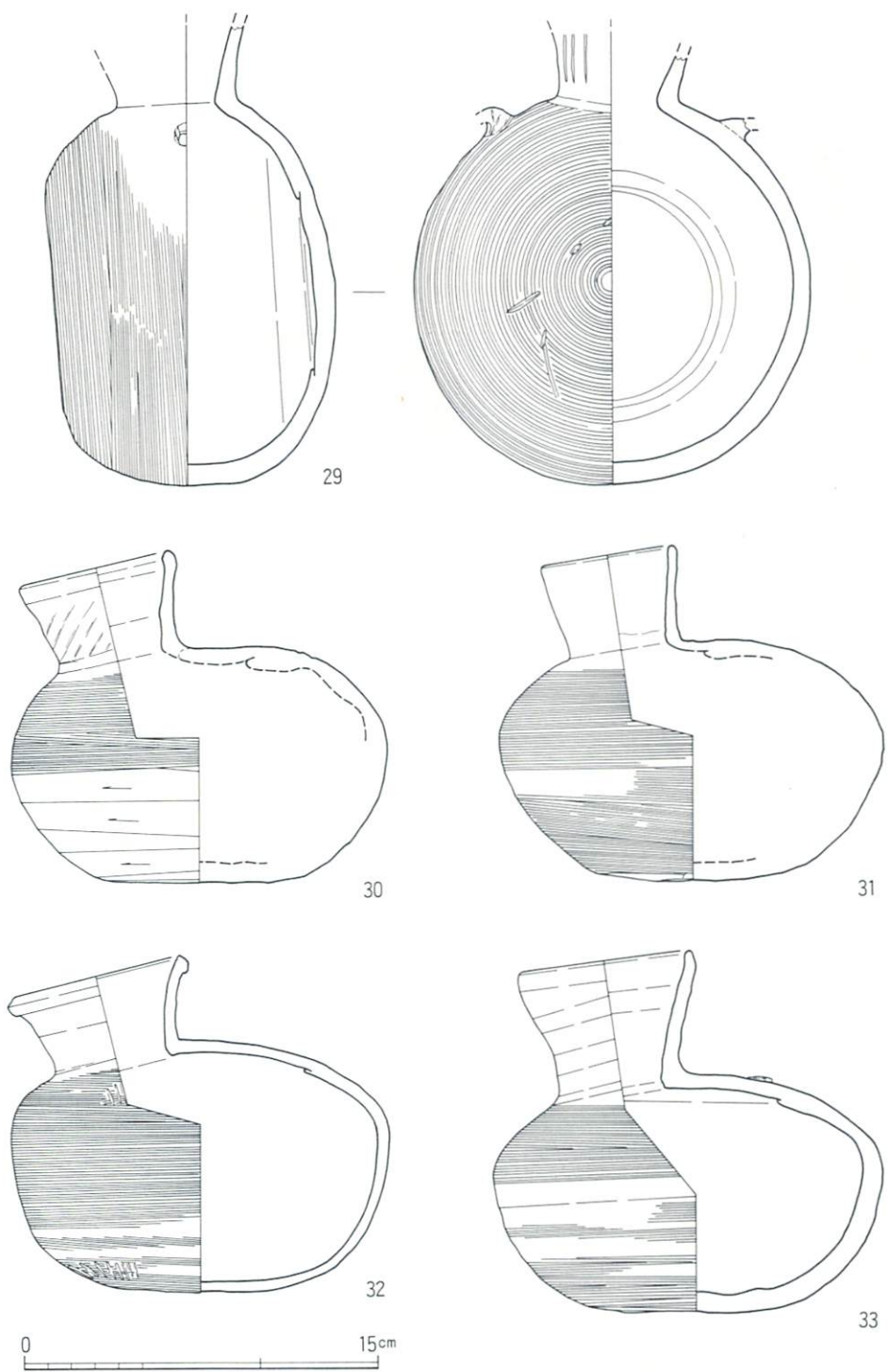
27



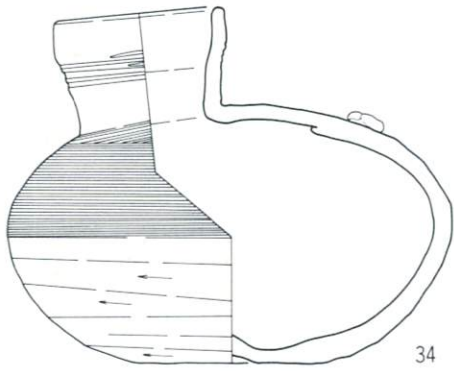
28

0 15cm

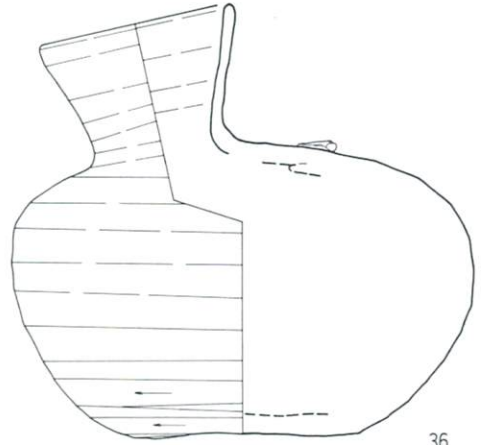
第18図 出土土器実測図④ (縮尺1/3)



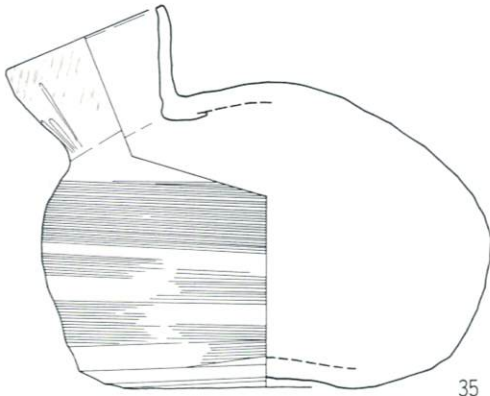
第19圖 出土土器実測図⑤ (縮尺1/3)



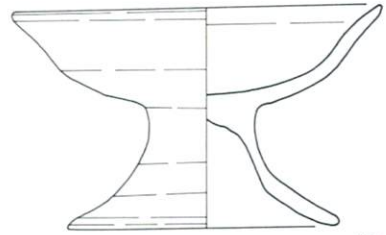
34



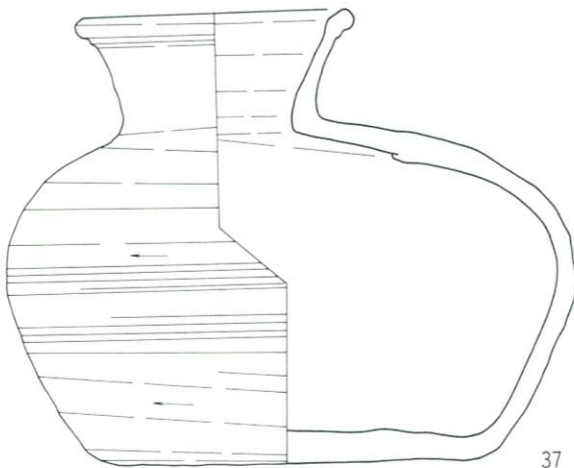
36



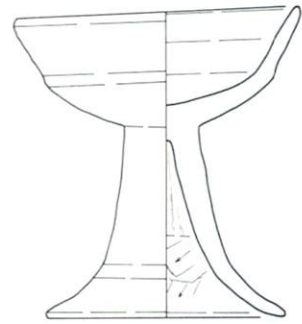
35



38



37



39



第20図 出土土器実測図⑥ (縮尺1/3)

(20・22・24・26・29)、丸くつくられるもの(23・25)の3種がある。胴部はカキ目調整されるが、22の前面はナデ、23の前面はヨコナデの後ナデ、背面は回転ヘラ削りの後、ヘラ状の工具でナデ、25の背面は回転ヘラ削り調整が行われる。29の背面平坦面は、ヘラ切り離しされる。ヘラ記号は、23・29の頸部に施される。24の頸部と胴部の境には櫛描文が認められる。22・29の胴部前面はヘラ状工具痕が観察されるが、ヘラ記号の印象ではない。25・26・29は把手を有する。大形品の27は、口縁部1/4と胴部の一部をわずかに欠く。口径10.3cm、器高23.1cmを測る。調整は中形品と大差ない。灰色を呈し、焼成良好。28は、口縁部を1/2を欠損する。復原口径11.2cm、器高25.0cmを測る。肩部に把手を有する。器壁は風化が著しく調整不明であるが胴部下位の一部にカキ目を残す。灰色を呈すが、焼成不良で軟質である。27は玄室内床面出土、他は羨道部床面からの出土である。

平 瓶 (30~37) 31が玄室の左壁玄門側コーナー床面出土、他は羨道部左壁側の床上出土である。30・31・36・37は完形品。32・33・34・35は口縁部の一部を欠損する。大きさは、31~35はほぼ同大で、器高13.9cm~15.1cm、胴部径は16.0cm~17.8cmである。30は器高10.8cmでやや小ぶり、36は器高17.0cm、胴部径18.9cmとやや大きい。37は大形品で胴部径は22.6cmを測る。口縁部の形態は、口唇部を肥厚させるもの(32・37)と丸くおさめるものの2種ある。胴部外面は、全面をカキ目調整を行うもの(31・32・33・35)、胴部下半に回転ヘラ削り調整を残すもの(30・34)とがある。底部外面は、カキ目調整(32・33)、ヘラ削り調整(31・35)、ナデ調整(34・37)がある。30はヘラ切り未調整である。33・34・36の肩部には、疣状の突起を有する。いずれも焼成は良好である。

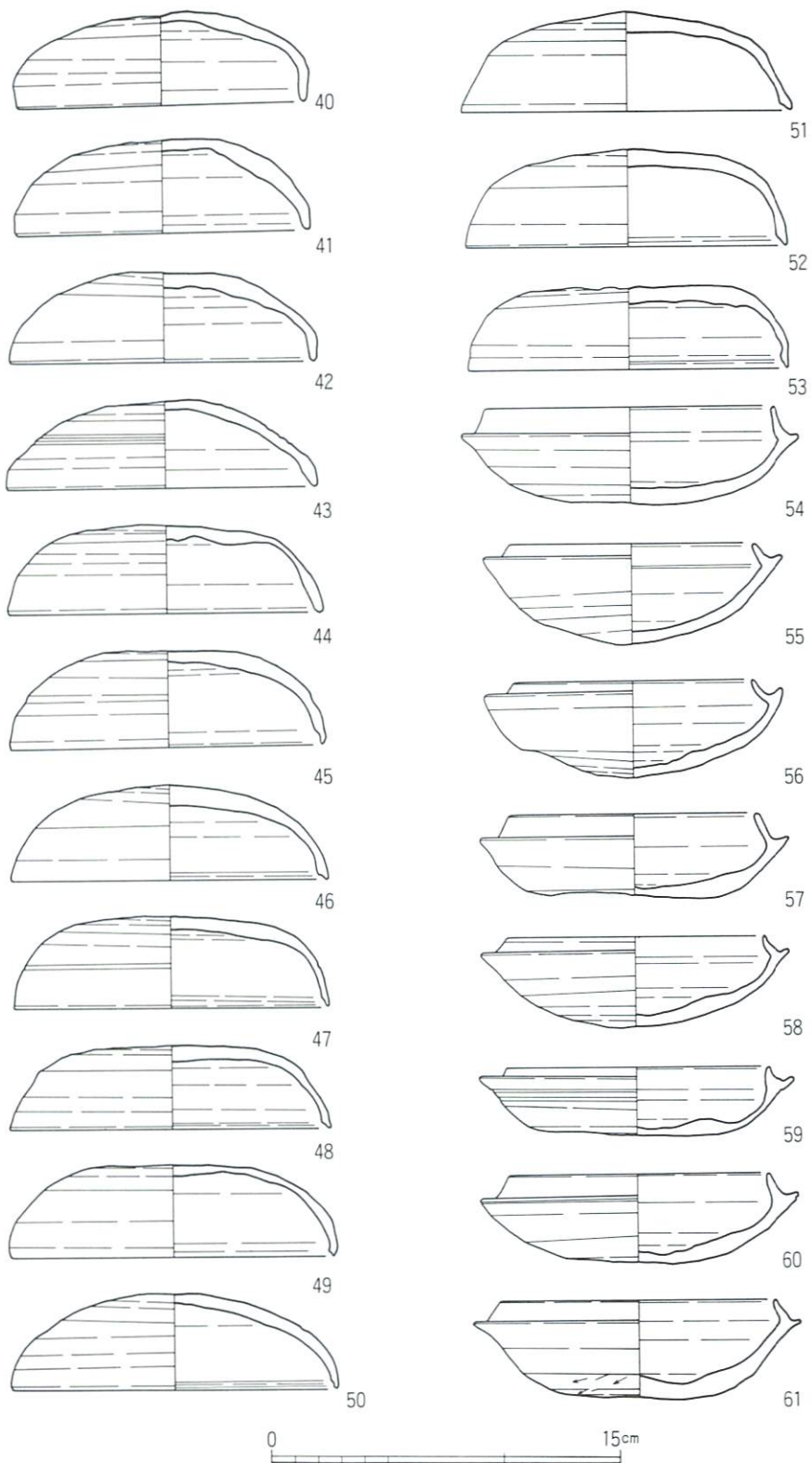
#### 土 師 器

高 杯 (38・39) とともに羨道部床面からの出土である。38は口径14.8cm、器高8.7cm、脚裾径10.8cmを測る。脚裾の先端をわずかに欠損する。器壁の風化が著しく調整は不明である。39は口径11.4cm、器高12.1cm、脚裾径9.6cmを測る。38と同様に風化のため調整は明確ではないが、杯部外面は横ヘラ磨キ、脚部外面は縦ヘラ磨キと思われる。脚裾部はヨコナデ調整。脚部内面にヘラ削りが認められる。ともに明茶褐色を呈し、焼成は良好である。

#### 墳裾及び墳丘表土出土土器

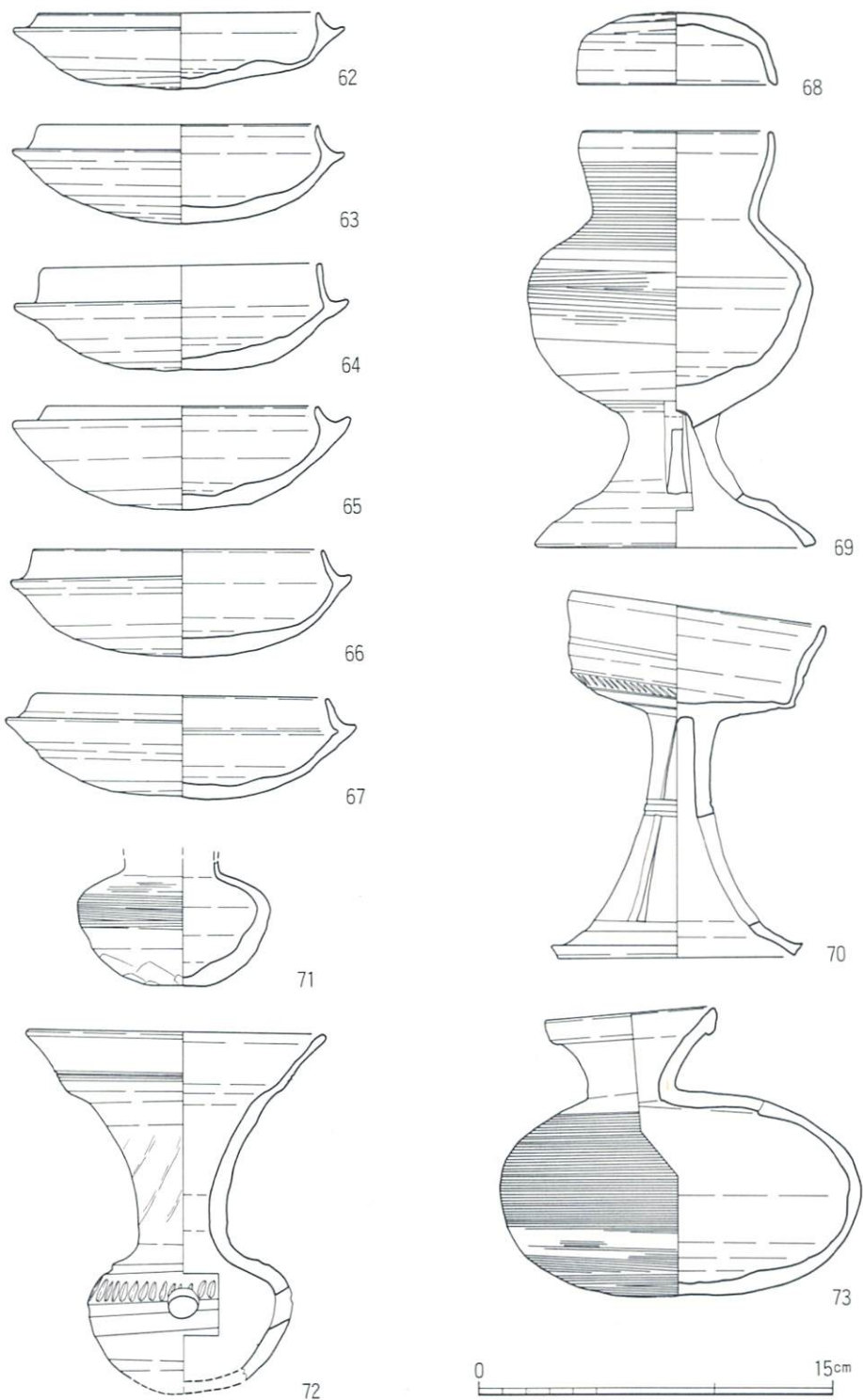
#### 須 恵 器

蓋杯・蓋(40~53) 大半が破片で出土した、接合の結果なお口縁部を欠損するものが多い。法量は、口径12.3cm~14.1cm、器高3.5cm~4.1cmまでの大きさである。天井部から体部にかけて丸味をもち境が明確でないもの(46・50)、天井部が平坦で、体部との境が明確なもの(44・47・48・49・53)との2種あるが、他は区別できない。40~43の口縁部は直に下り、端部は丸い。調



第21图 出土土器实测图⑦(縮尺1/3)





第22图 出土土器实测图⑧(缩尺1/3)

整はすべて同様で、天井部外面は回転ヘラ削り調整、内面はナデ調整。他はヨコナデである。ヘラ記号は、40・41・42・44が天井部外面に、46・48・52・53は内面に認められる。

蓋杯・身（54～67） 蓋と同様に口縁部を欠損するものが多い。法量は、口径10.2cm～12.3cm、器高2.9cm～4.4cm、立ち上り高0.6cm～1.5cmの大きさである。形態的には、底部から体部にかけて丸くつくられるもの（54～56・58・60・63～67）と、底部が平らなもの（57・59・62）の2種に分けられる。調整法はすべて同様である。底部外面は回転ヘラ削り調整、内面はナデで、他はヨコナデ調整を行う。61の底部外面は一部に静止ヘラ削りを観察できる。ヘラ記号は、54が内面、55・56・59・60・65は底部外面に刻まれる。54は53と、ヘラ記号、胎土、焼成、色調が酷似しておりセットと考える。焼成は65がやや甘い、他は良好である。

蓋（68） 口径8.4cm、器高3.0cmを測る小形品で短頸壺の蓋であろう。底部外面は回転ヘラ削り調整、体部、口縁部外面はヨコナデ、内面は全面はすべてナデ調整。焼け歪むが、胎土・焼成ともに良好、黄灰色を呈する。

長頸壺（69） 約1/3を欠損する。復原口径8.0cm、器高17.3cmを測る。頸部から開き気味に立ち上がり、口縁部は内傾させ、端部は丸い。肩部と体部の境に浅い沈線が巡る。脚には長方形の

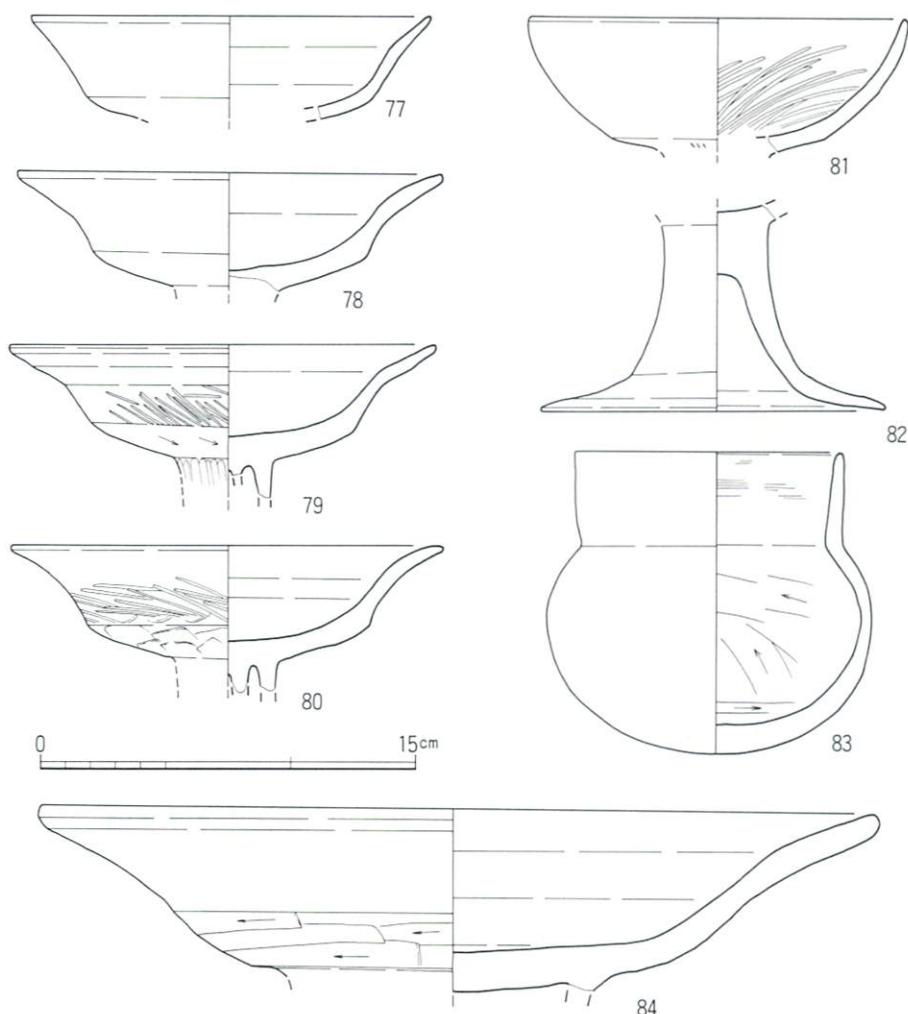


第23図 出土土器実測図⑨（縮尺1/6）

透し孔が3ヶ所にはいる。頸部から胴部中位までの外面は、カキ目調整、以下底部までは、回転ヘラ削り調整。他はヨコナデ調整。胎土・焼成ともに良好、黄灰色の自然釉をかぶる。

高杯(70) 全体に焼け歪み、杯部・脚部ともに傾く。脚部を1/2ほど欠損する。口径10.8cm、器高は13.8cm~15.3cmを測る。杯部はやや外傾気味に立上り、口縁部は内側におさえ、端部は丸味をもつ。体部中央に沈線が巡る。底部との境には刺突文を施し、上下に沈線を巡らす。脚は長く、長方形の透し孔が3ヶ所にはいり、その上部には、深く刻み目を入れる。その間には二条の沈線を配する。

短頸壺(71) 口縁部を欠損する。現存高5.3cmを測る。体部上半はカキ目調整、中位はヨコナデ、下半は回転ヘラ削りの後静止ヘラ削り。内面は底部をナデ、他はヨコナデ調整される。灰色を呈し、胎土、焼成ともに良好。



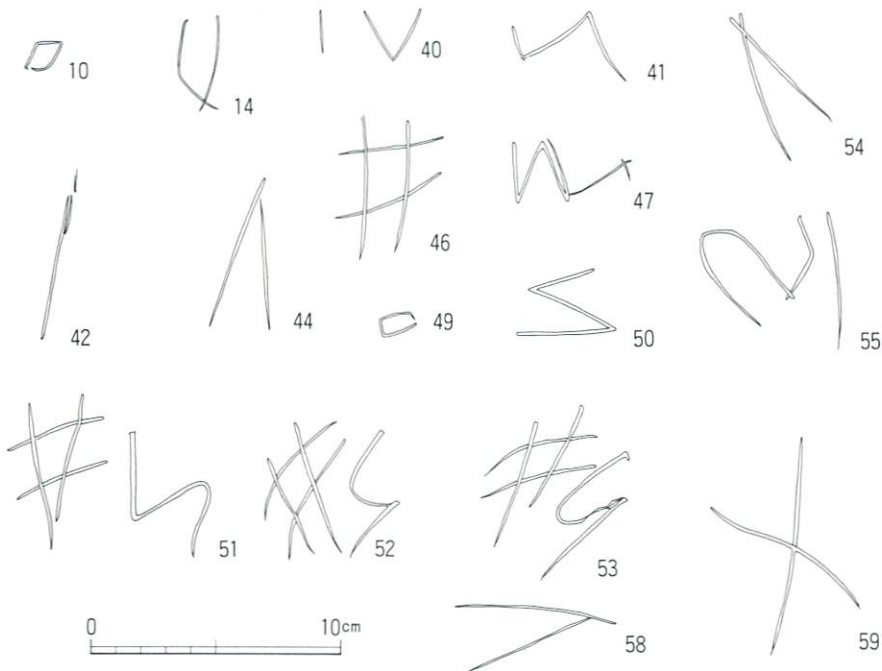
第24図 出土土器実測図⑩(縮尺1/3)

甗 (72) 口頸部の一部と体部下半の1/2程を欠損する。復原口径12.6cm、器高約15cmを測る。頸部は長く、口縁部との境に段を有する。この段の上に二条の沈線が巡る。頸部の外面にはしぼり痕が残る。体部上位に上下を沈線によって区画された刺突文が施される。胴部中央に円孔をもつ。口頸部外面、口縁部内面はヨコナデ、胴部下半の外面は、回転ヘラ削り調整を行う。灰黒色を呈するが、一部に黄灰色の自然釉をかぶる。

平瓶 (73) 口縁部を少しと胴部約1/4を欠損する。口径7.3cm、器高12.1cm、胴部径15.2cmを測る。口縁部は肥厚させ段を有する。胴部外面はカキ目調整、内面はナデ、頸部は内外面ともヨコナデの後ナデ調整。口縁部はヨコナデ。灰色～灰黒色を呈し、焼成は良好。

甗 (74・75) 74は、口縁部1/4、胴部1/2、底部を欠く。口径22.2cm、現存高44.5cmを測る。胴部最大径は中位よりやや上方にあり、なで肩である。口縁部はやや外反し、端部は肥厚させ段を有す。胴部外面は疑格子タタキの後、カキ目が施され、内面は同心円のタタキ痕、下半部は平行タタキを残す。75は胴部中位以下の破片である。外面下位はカキ目調整。

器台 (76) 高杯形の通有の器台である。杯部は1/3、脚は3/4を欠損する。口径28.1cm、器高35.3cmを測る。口縁部は杯体部より大きく外反し、口縁端は肥厚させ段を有する。口縁部には波状文を施し、杯体部との境に一条の凹線を配する。口縁部はヨコナデ、杯体部外面はヨコナデタタキ痕が残る。内面はナデ調整、同心円あて具痕が残る。脚部との境は段を有す。脚部は3ヶ所に二条の凹線を配して4段に区切る。最上段には長方形の透し孔(4ヶ所)と楯描文を施し、



第25図 ヘラ記号実測図(縮尺1/3)

2 段目は三角形の透し孔（4 ヶ所）、その上に楕描文、下に波状文を施す。3 段目は三角形の透し孔（4 ヶ所）と波状文、4 段目は透し孔はなく波状文を施している。脚部外面はヨコナデ調整、2 段目にはタタキ痕が残る。脚内面は、上半がナデ、下半はヨコナデ調整を行っている。底径は 23.7cm に復原できる。灰色を呈し焼成は良好である。

#### 土 師 器

高 杯（77～82・84） 77～81・84は1/2以下の杯部片である。口径は、15.8cm～17.2cm に復原できる。84は大形品で、復原口径33.4cmである。77～80は、杯体部から外反する口縁部をもち、端部は丸くつくられている。いずれも器壁の風化が著しく調整は不明なものが多い。79の杯部外面はヘラ磨キ、底部はヘラ削り、脚は縦位のヘラ磨キで施す。81は杯底部から口縁部まで丸味をもつ。82は、脚部片で裾は大きく開く。復原脚部径13.7cm。81と同一個体か。84は、杯体部から外反する口縁部をもち、端部は丸い。杯底部はヘラ削り調整されている。いずれも茶褐色を呈し、焼成は良好である。

壺（83） 口縁部は直立し、端部は丸い。体部は球形を呈す。体部内面はヘラ削り調整。復原口径10.6cm、器高11.8cmを測る。橙褐色を呈し、焼成は良好である。

### Ⅲ お わ り に

本墳は、標高約110mの高位置に構築された円墳で、眼下には須恵川の流れる平野を一望できる。また、周囲の同時期と考えられる、尾黒古墳群・大墳塚古墳群・尾黒南古墳群・城山古墳群が標高約50m前後の低丘陵に立地し、数基からなる群を形成しているのに対して、独立丘陵に一基だけ構築されており、本墳の被葬者はこの地域である一定の地位を占めていたものと思われる。

本墳は墳丘・石室ともに原状を損ねていたが石室・羨道部・墳丘から多くの土器が出土し、構築時を示す貴重な資料となった。石室・羨道からの出土は、杯蓋・杯身は比較的少なく、提瓶・平瓶が多く副葬されていたのが目につく。墳丘からの出土土器は杯蓋・杯身が主体であった。形態や調整上の諸特徴からそれぞれの時期差は明確にできないが、Ⅲ B期の段階のもので6世紀後半代に比定できるだろう。

石室・羨道から50点の鉄製品が出土した。刀・鎌の攻撃用の武器、鎧・轡等の馬具を中心に、戦具的なものが多い。

この地域の古墳には重要な資料が多く、乙植木古墳群や宣葉古墳群など4世紀後半から5世紀前半の古墳は次第に明らかになりつつあるが、6世紀代の小古墳群は実態が判明しないまま消滅したものが多く、早急に残された資料を整理し、その特色を解明しなければならない。

# 図 版



1. ヨムギ古墳遠景（岳城山山頂から）



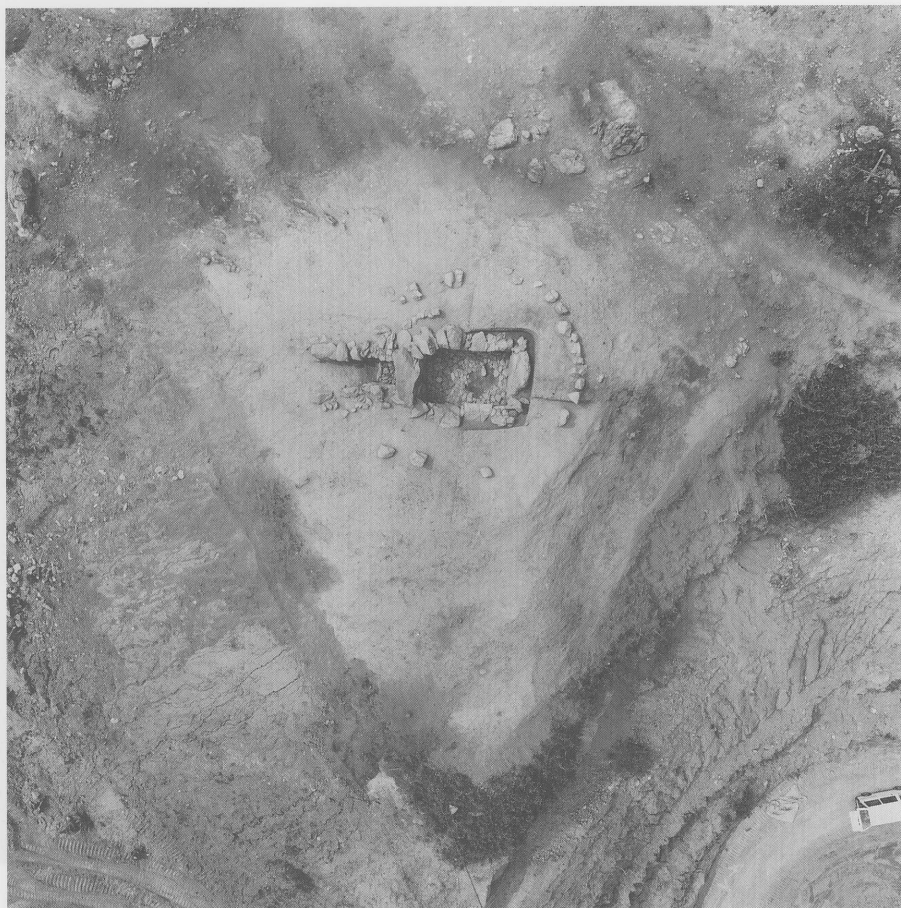
2. ヨムギ古墳遠景（北西から）



1. ヨムギ古墳全景（北から）

2. ヨムギ古墳全景（東上空から）





1.  
発掘後全景  
1



2.  
発掘後全景  
2



1. 墳丘内列石(西から)



2. 墳丘内列石(南から)



1. 石室奥壁



2. 石室敷石と玄門



1. 石室右側壁



2. 石室左側壁



1. 羨道と玄門



2. 羨道部敷石と仕切石



1. 玄門と閉塞石（墓道から）



2. 羨道と閉塞石（玄室から）



1. 石室と羨道の遺物出土状態



2. 遺物出土状態



1. 玄門付近の遺物出土状態

龍舟土器群の出土状況 上



2. 玄門付近の遺物出土状態

龍舟土器群の出土状況 下

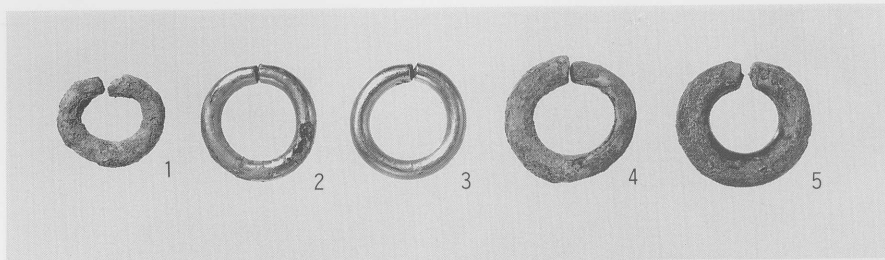




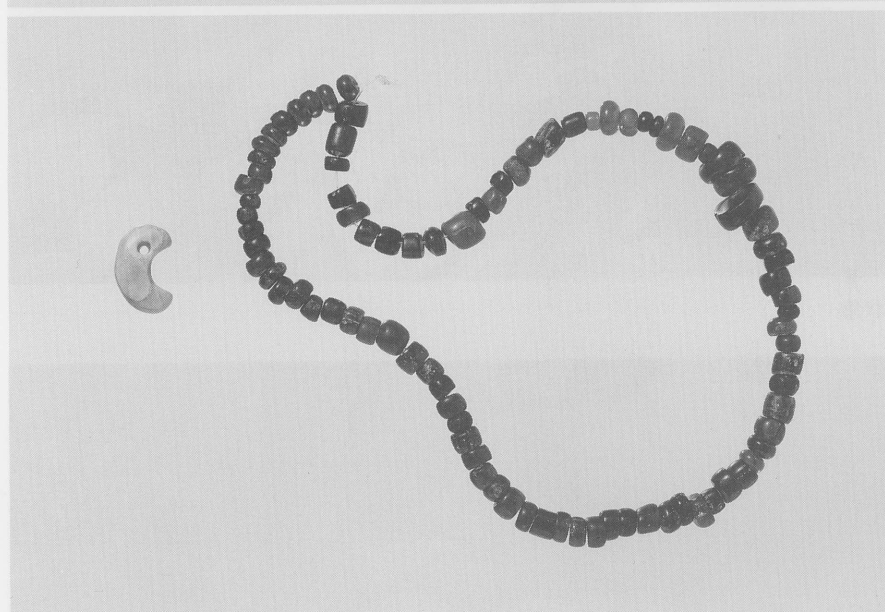
1. 玄門付近の遺物出土状態



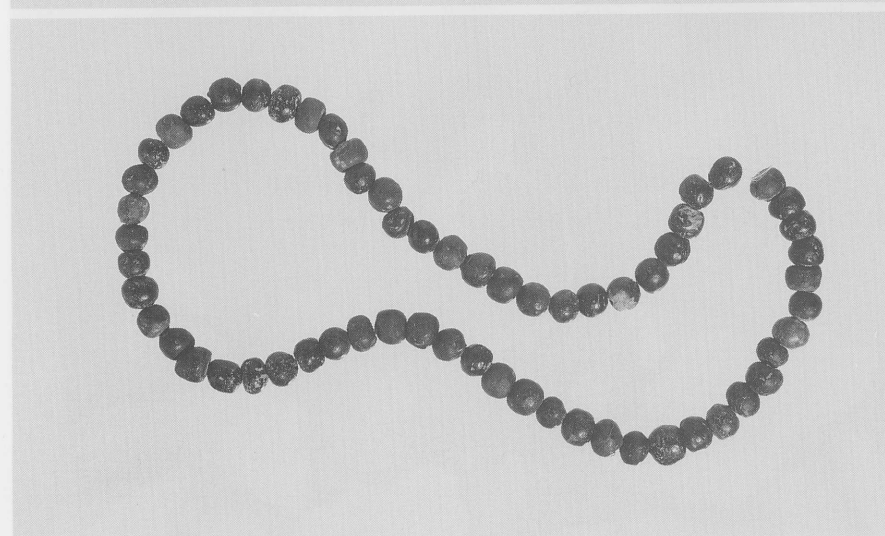
2. 玄門付近の遺物出土状態



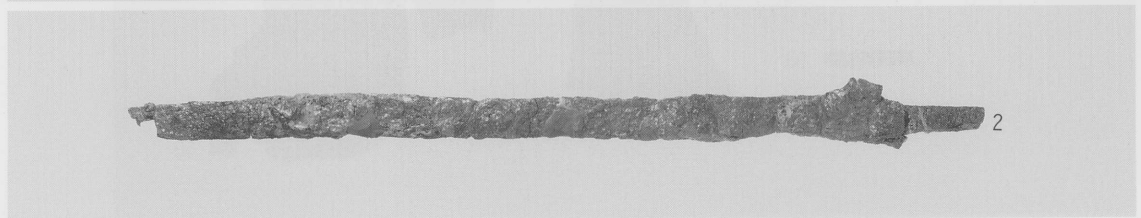
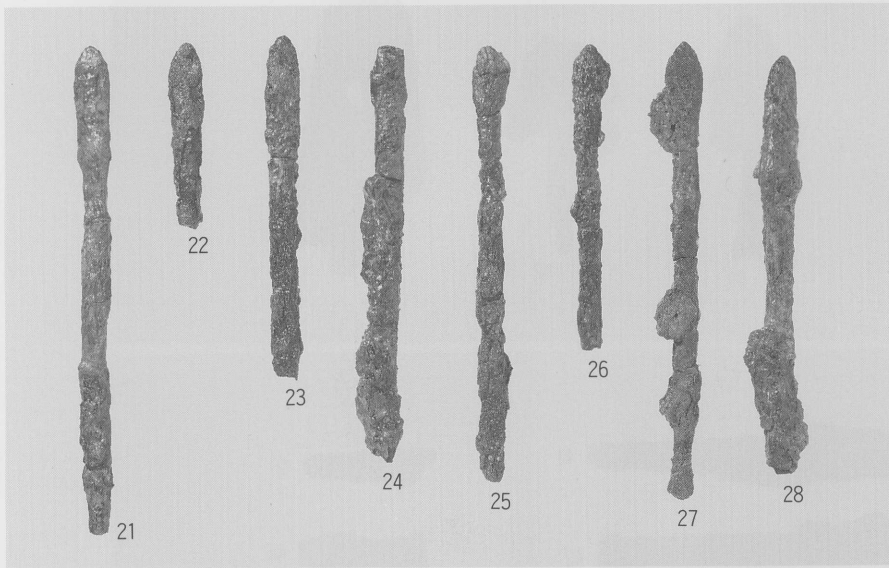
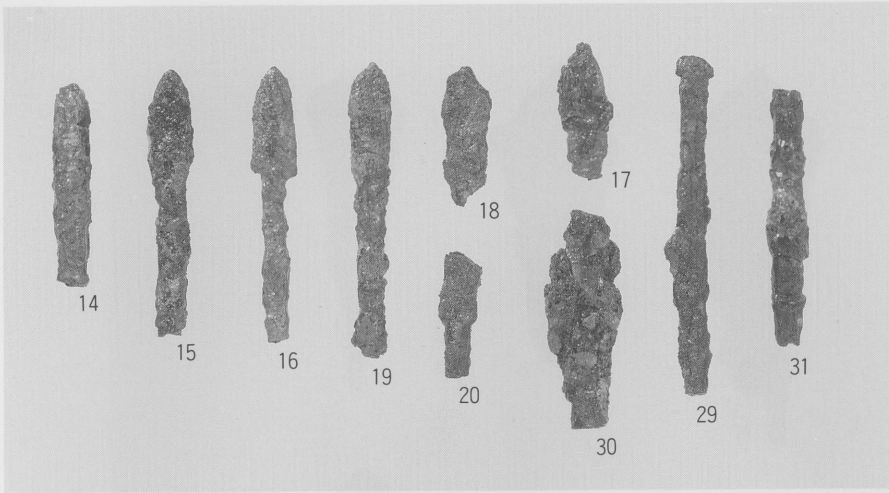
耳環

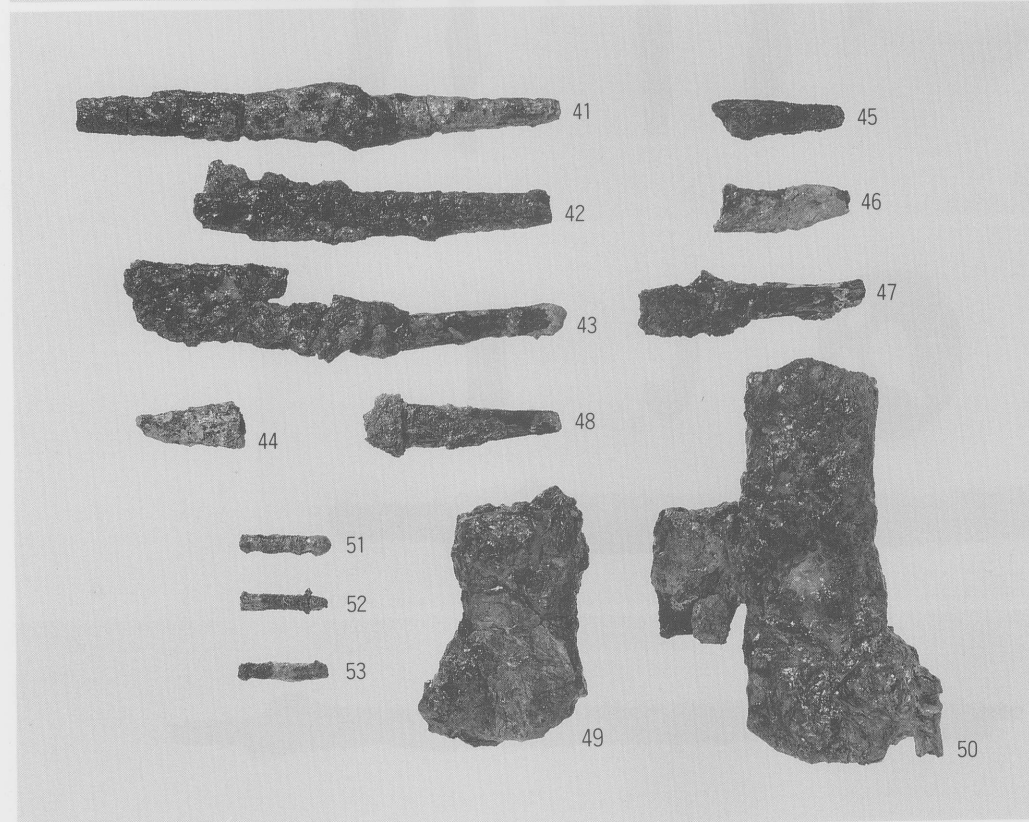
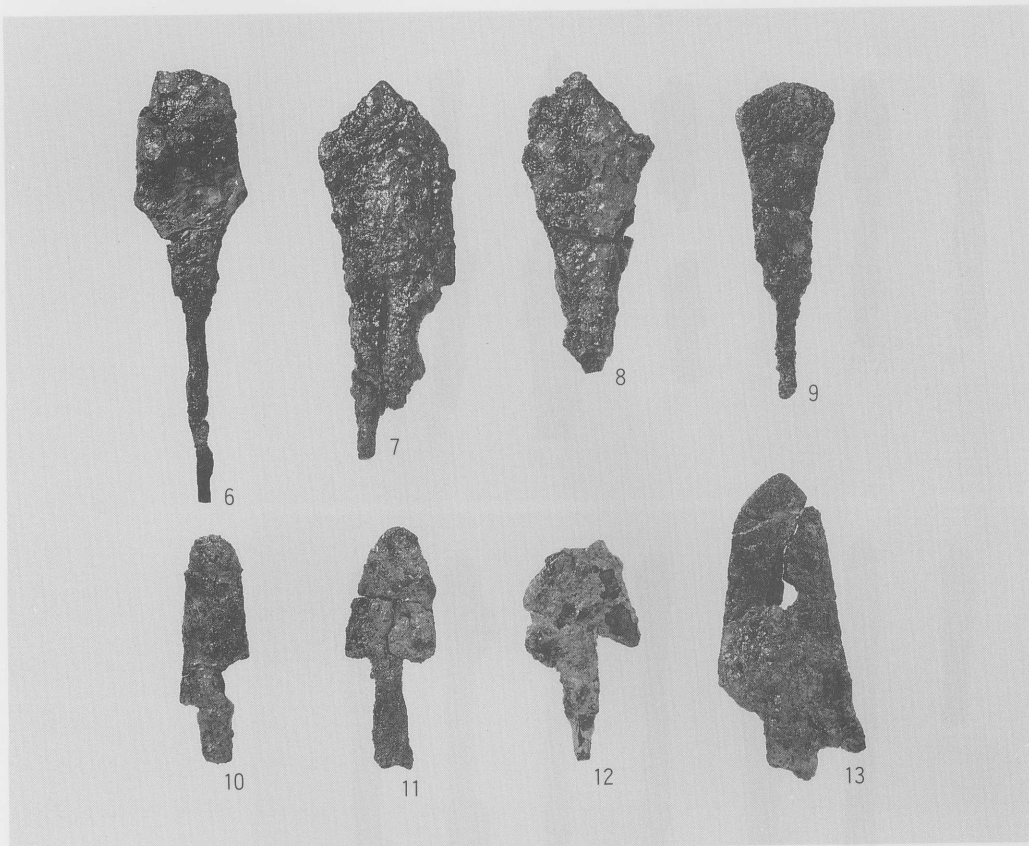


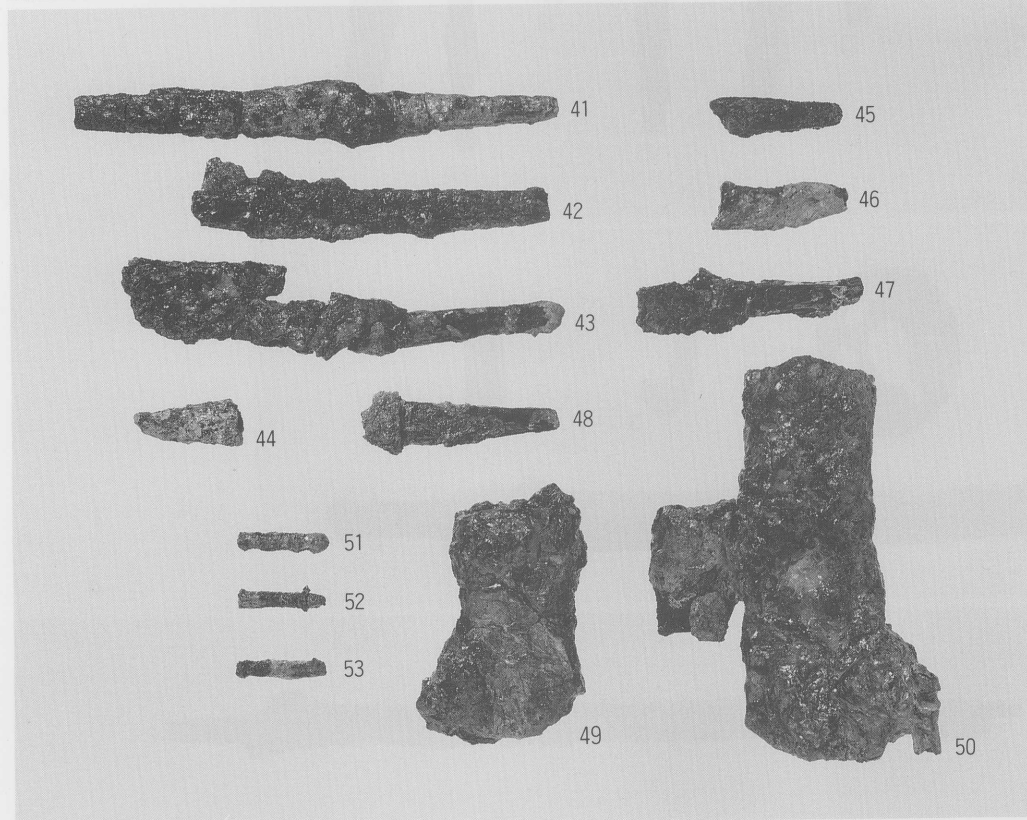
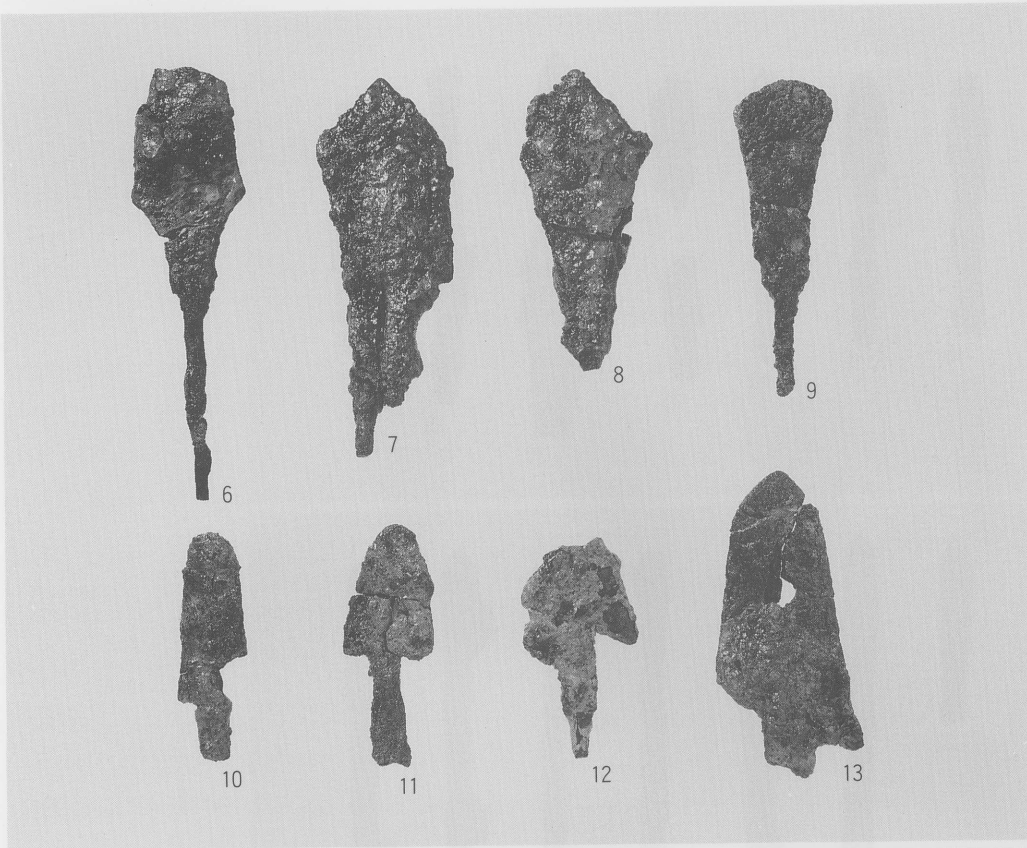
勾玉・ガラス小玉

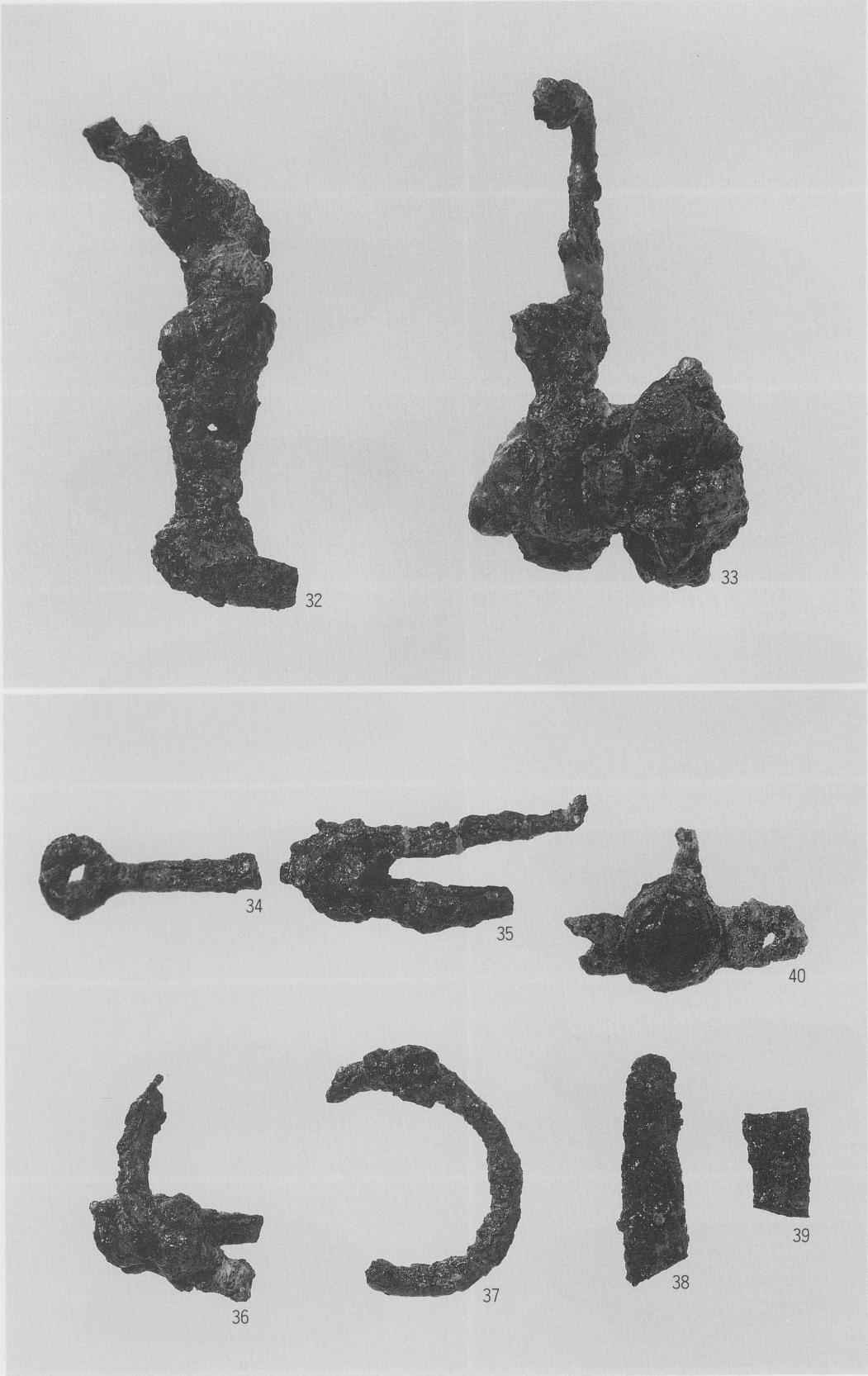


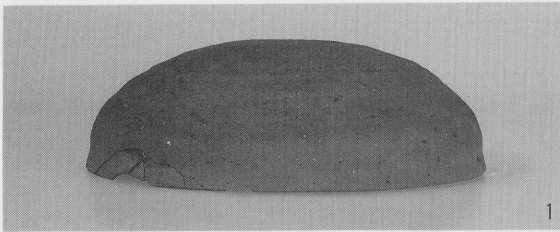
土玉



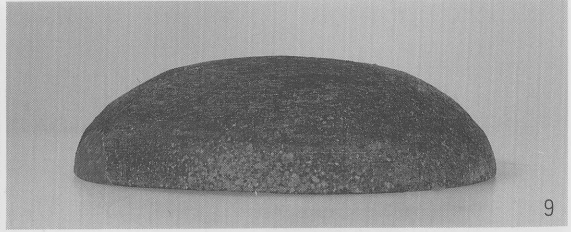




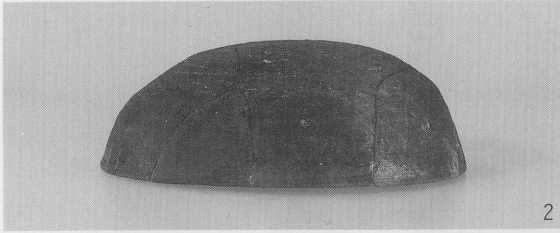




1



9



2



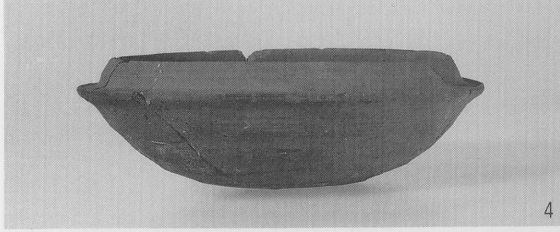
10



3



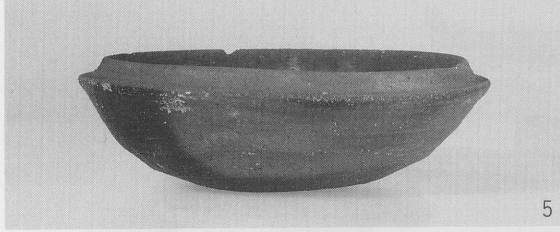
12



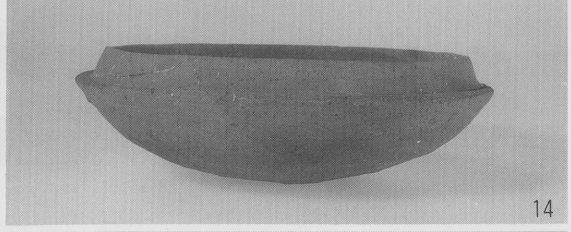
4



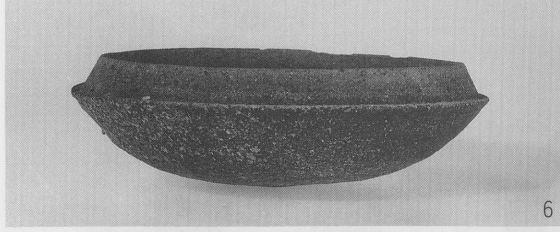
13



5



14



6



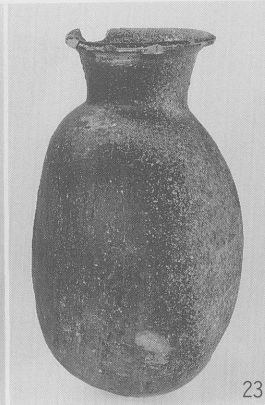
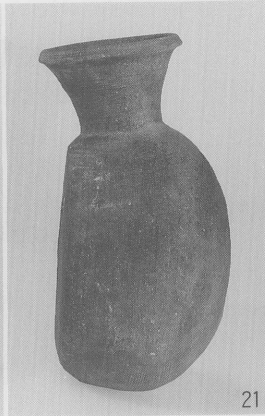
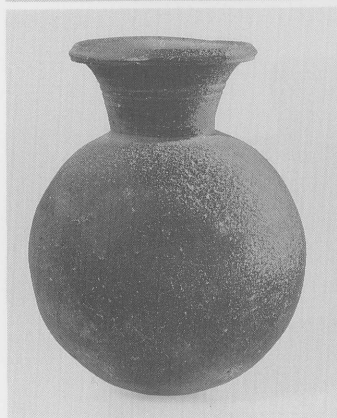
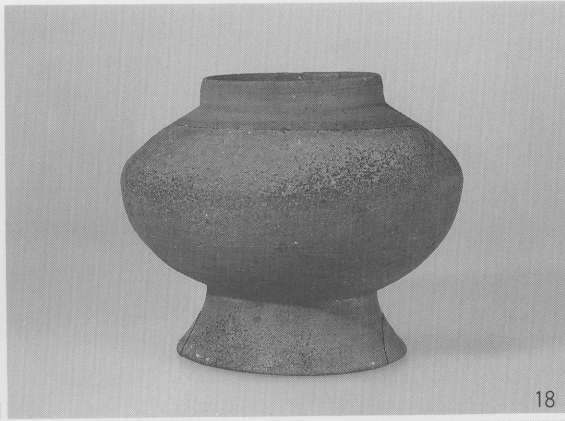
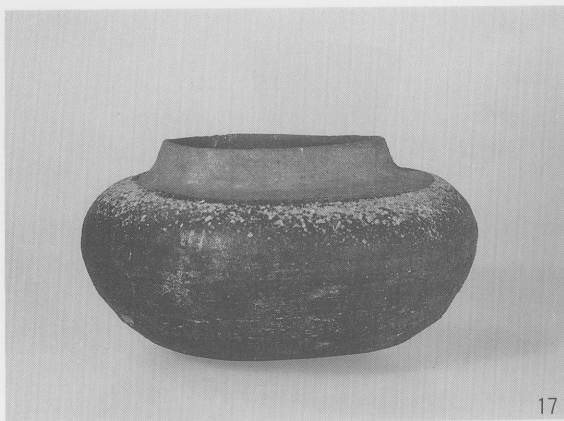
15



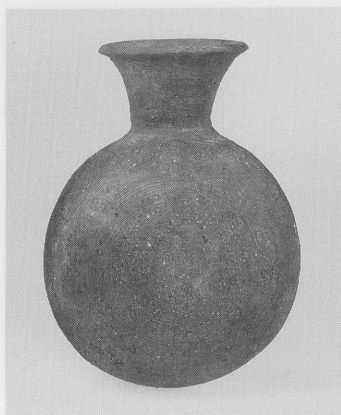
7



16



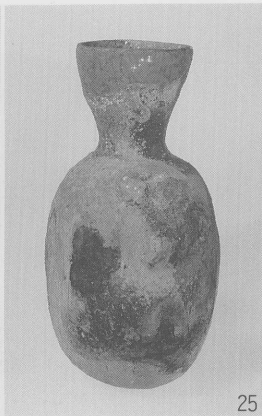




24



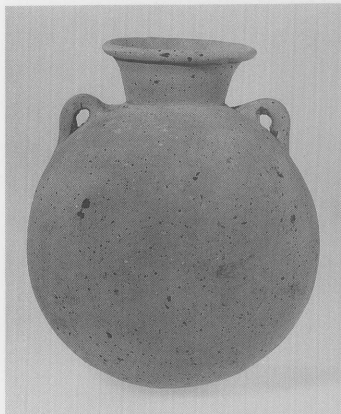
33



25



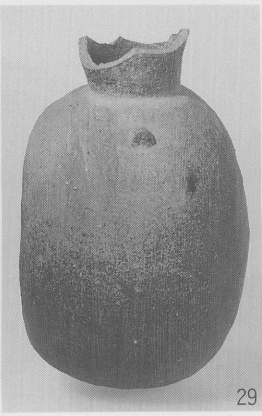
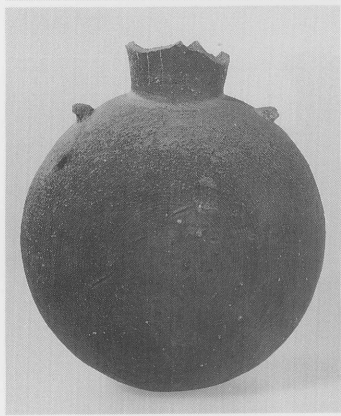
34



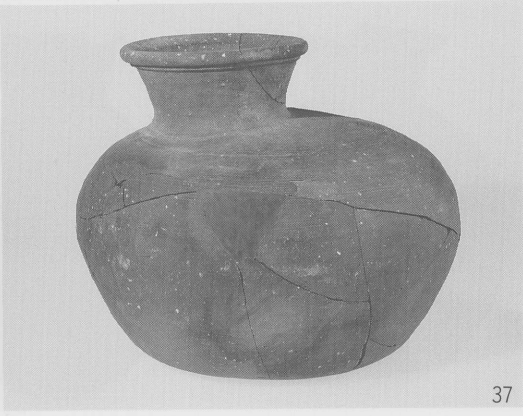
28



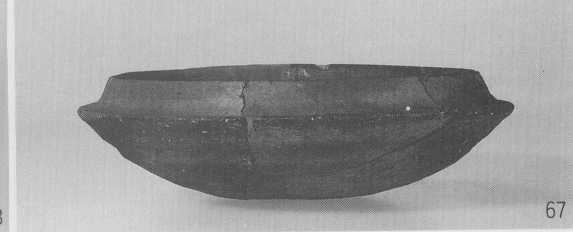
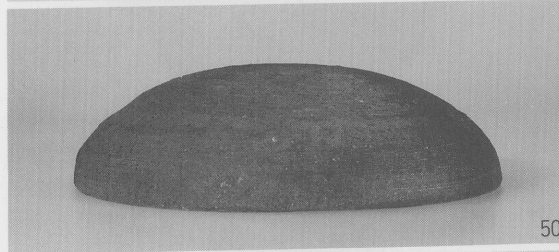
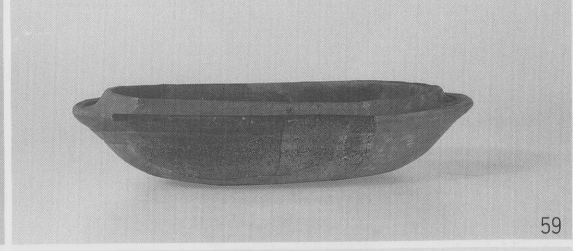
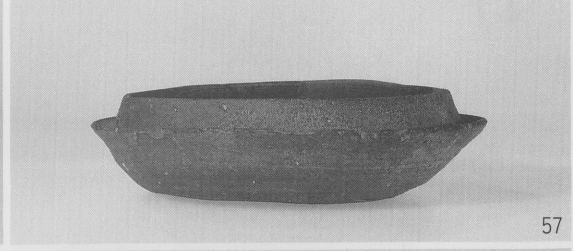
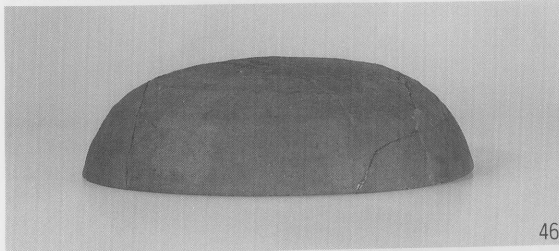
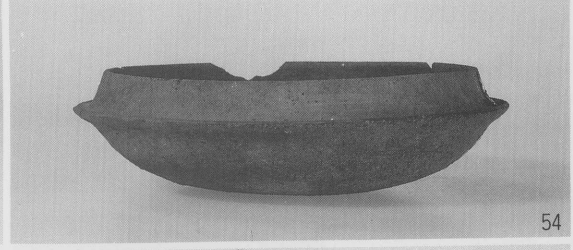
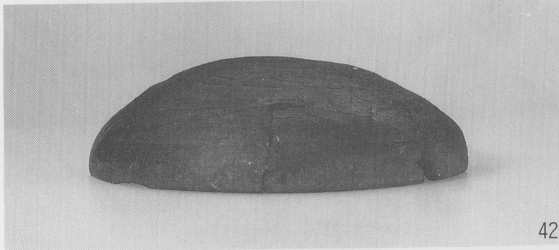
36

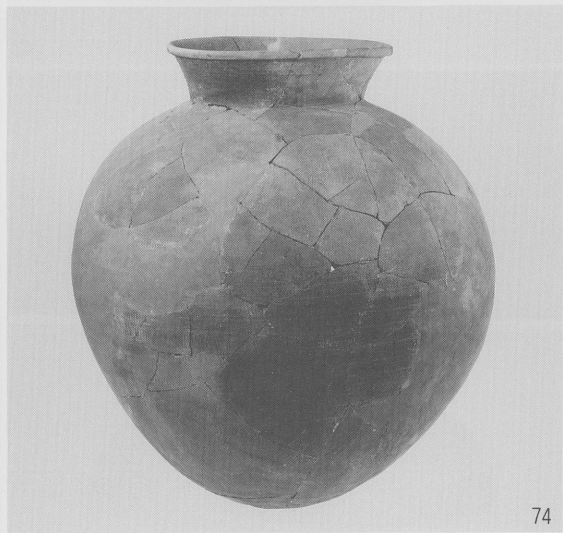


29



37





## ヨムギ古墳

須恵町文化財調査報告書  
第 3 集

平成元年 3 月 31 日

発行 須 恵 町 教 育 委 員 会  
柏 屋 郡 須 恵 町 上 須 恵 1117

印刷 ア オ ヤ ギ 株 式 会 社  
福 岡 市 中 央 区 渡 辺 通 2 丁 目 9 の 31  
電 話 092 (641) 1431